アランと共に

（Ⅲ）

高　村　昌　憲

百一　立方体

アランのプロポには、時偶、人物が登場します。一九〇八年五月二一日のプロポに登場するのは、まさにカトリック教徒になろうとしている二人の男女でした。アランは二人の訪問を受けましたが、彼らは独創的な思想で有名な人たちでした。女性の方は、アランの古い女友だちです。彼女は出来が良くて、何でも知っている頭脳の持ち主です。そのことを話題にして、「それだから彼は気が狂っているのです」ともう一人の男性について言いました。彼女は彼を大変高く買っていても、「それが今少しばかり彼を低く見過ぎていたのだ」とアランは思います。人間は正確に対象を見ることが困難です。

同様なことを、アランは科学が進歩したと言う何人かの人に、「もし立方体の辺を二倍にするなら、当初のものの二倍になった辺は、何個の立方体になるのでしょうか」と質問しました。その答えを見付けるために、先ずアランは二つの方法を言います。一つ目は幼稚園などへ行って、実際に立方体を手にとって各々の辺が二倍の形になるまで積み重ねれば良いのです。わざわざ幼稚園へ行くのが面倒な場合は、遠近法を使って紙に描いてみるのが二つ目の方法です。しかし、この二つ目の方法は上手に描けないと、確実でなくなります。アランは言います、「もしも描くのが下手であったり、想像力がなかったならば、このやり方では不確実になるかもしれません。結局のところ、木製の立方体や鉛筆や紙が無くても、思考によって解答することが出来ます。しかし、これは危険な方法です。何故なら、紙の助けも借りずに生まれるイマージュは、写真屋で動き回る子供と同じ位に動くものでもあるからです。きれいに思い描くのは不可能です。」

ところがアランが質問すると、殆どの人は幼稚園へ行って確かめようとしません。紙に描いてみようともしません。只、頭の中で、想像力だけで解答しようとしますから、九倍とか四倍とか六倍と言います。時間をかけて忍耐強い人は八倍であると答えましたが、敢えてアランは答えを言わずに、立方体を与えて遊んで貰いました。

そこには他にも人がおりました。背が低くて何でも知っている知性ある男ですが、彼は、「何でも私たちのことを馬鹿にして、そのことを決して隠そうとしない人」でした。彼は八倍である、と正解を答えます。彼は、「木製の立方体も紙も要りませんでした。想像力も使いませんでした。問題は数学の演算に還元して解決していました。辺を二倍にします。そして計算しました。二掛ける二は四で、二掛ける四は八です。この様にして彼は、最も簡単なやり方で苦労することなく真理に到達しました。彼は他人の成果を利用したのです。彼は言葉を大変立派に器用に処理したのです。快活で才能に恵まれた精神というものは、殆ど何時もこの様に思考します」とアランは言っています。

確かに八倍は正解に違いありません。しかし、何故その答えが導かれたのでしょうか。それは代数学を使うことで真理を導くことが出来たのです。従ってアランが言うように〈他人の成果を利用したのです〉から、決して自分だけで思考したのではありません。八倍という結果だけが正解であれば良い人にとっては、問題はそこで終了しています。しかし、実際に立方体を手にとって八倍を確かめた人は、全てを自分の眼と手と頭で理解します。四倍とか六倍とか九倍と答えた人々は、頭だけで思考することの危険を察知します。それを実感し吟味します。思考することは、まさに多くの誤謬を含んでいることを学びます。それはアランが最も大切にした教育であり思想です。教育とは結果ではない所以です。間違いは、自分にとっての真実を発見する肥料に

なります。「一輪手押車が発明されます。でも再びそれを考えたりしません。精神はその一輪手押車を押して行くばかりです。それ故に、はいどう、〈英知〉に向きなさい」と書いてアランはこのプロポを結んでいますが、一度、一輪手押車が発明されると、人はそれに荷物を載せて押して行くばかりです。一輪手押車は、自分だけの力で押して行くものです。ですから〈英知〉の全てを理解することが可能であることをアランは言っているのです。

カトリック教徒になろうとしている男女も、結局は〈他人の成果を利用〉することと変わりない様です。〈言葉を大変立派に器用に処理〉することと変わりなく、決して信仰と結び付かないことをアランは知っています。自分の〈一輪手押車〉を見付けて、真の自分だけの英知を発見せよ、とアランは言っているのです。そこから真の楽しみや喜びが湧出して来る筈です。真の心の平安が訪れる筈です。何故なら、結果が全ての世界から決別しているからです。真の動機付けが確立された活動へ発展して行くことが可能になるからです。地位や名誉や名声という他人が決定する要素は、自分が望む動機付けとは無関係になって来るからです。頭だけで考えると、それらの要素は重要に思えて来ます。しかし実際に眼と手を使って、見て触れて実感すれば、明らかに重要であると思っていたものが間違いであることが分かります。立方体が、四倍であり、六倍であり、九倍であると思うことは間違いであることが分かります。（完）

百二　七十四人の歴史家

七十四人の歴史家とは、アランが一九〇八年五月二五日のプロポを書いた頃にソルボンヌ大学にいた歴史の教授たちのことです。彼らは、歴史家として〈事実〉だけで満足しているとのことですが、歴史の事実とは何でしょうか。昔は人間だけを裁判に掛けたのではなく、動物や生命の無い物にも裁判したことを、古代ギリシアの歴史家ヘロドトス（前四八四頃～前四二五頃）は記しているとのことです。動物や物という〈事実〉が、裁判によって様々な罪が宣告されたのです。罪があるのか無いのか、あるいは重い罪か軽い罪か、全くの人間的解釈によって事実が変化したのです。歴史とは、事実の積み重ねであると信じられていますが、実は動物や物への裁判の様に、事実は様々に解釈されて変えられているのです。人間に危害を加えた石を裁くためにも裁判が行われましたが、そのことについてアランは次の様に書いています。

「「それは真実ではありません。石を裁くために、人間が裁判所に集まることがあってはなりません」。そうです。そのことが書かれた本が十冊あっても、私の気持ちは決して動揺しません。全く、そんなにも遠くまで遡らなくても、周知の如く完全に空想の出来事を書く色々な新聞記事を十件示すのは難しいことではありません。ドレフュス事件から〈歴史の教訓〉を幾つも引き出すのは困難ですが、一つだけ歴史の良き教訓を取り出すことが出来ます。それは何よりも証言は疑ってかかることであり、次々に色々な意見を聞いて、私たちの見方を変えることです。」

このように書いて、証言の曖昧さを指摘しています。歴史の真実とは〈私たちの見方〉に係っているのです。更に、アランは歴史家に対して、幼稚園へ行くことを勧めて言います。

「「幼稚園へ行ってご覧なさい。あなたはそこで屢々、純真な子供たちが小石とかベンチで傷付けられるのを見ます。小石やベンチを裁判に掛けて罰を与えよ、と言って下さい。あなたは馬鹿にされるでしょう」。

しかし、その歴史家は私（アラン）の眼の前で、それらのテキストを見せているのではないでしょうか。私はそれらのテキストを嘲笑します。全く愚かな者たちが膨大な書物を書いているのは分かり切ったことです。もしも鼠が残されたものを全て食べて、一人の狂人の記憶を子孫に残したならば、彼の周りにいる子供たちや大人たちを見て考えないで、その狂人が言うことを信じなければならないのでしょうか。」

歴史家の書いた本とは、子供たちを傷付けた小石やベンチという事実を裁判に掛けて、その〈判決〉について述べている様なものです。事実の食べ残しを、歴史家という狂った鼠が全て食べる様に、一人の狂人の記憶を浩瀚な著作として子孫に残した様な〈歴史〉であるために、アランは嘲笑します。そうではなくて、事実の周りにいる子供たちや大人たちを見ることであり、考えることです。そういうことをしないで、食べ残した事実だけを食べた狂人の言うことを信じることは出来ません。何故なら、小石やベンチを裁判に掛けている様なものであるからです。

多くの人々は、事実ばかりを信じないで、伝説というものも受け入れています。沢山の物語も創られました。それらには人間が語られています。石によって危害を加えられた人間や、小石やベンチに傷付けられた子供たちが表されています。それらのものも歴史につけ加えるべきです。そういう努力を行わない歴史家は、人間を見たり考えたりしないために、ヒンズー教のような宗教や謝肉祭のような祭も見逃して仕舞います。宗教や祭は、歴史とも決して無縁でない筈です。つまり歴史は、市民と共に創られているのです。王の決断で歴史が創られている、と見る処に様

々な狂気が生まれているのです。従って、歴史とは戦争の歴史である、との歪曲された歴史観が一世を風靡して来ます。戦争になれば為政者たちは、市民は動物であり武器という物であると見做します。決して市民を人間として見たり考えたりしません。歴史が〈事実〉にすり替わります。かくしてアランは、歴史を重視しませんでした。歴史が王という一人の人間によって創られて来たかの如き見方をする限り、そこに表れるのは物であり、動物であり、狂人であるからです。そこには市民が不在です。

何故なら、歴史をその根底で動かしたのは人間であり市民であるからです。従って歴史の本質とは、現代と密接に関係して来る見方であり思想であると言っても間違いはないと思います。歴史とは現代人と過去の人間との関係を見る見方であり思想である、と言っても過言ではありません。決して人間が食べ残した〈事実〉の羅列ではないのです。（完）

百三　満ち潮と引き潮

「楽観主義は意志のものである」とアランは有名な『幸福論』の中で書いていますが、楽観主義者が意志によるにしても、美徳によってより良く進化することとは別問題のように思われます。楽観主義者には悪人もおりますし、意志の強い者にも悪人はおります。一九〇八年五月二七日のプロポは、ある楽観主義者とアランの会話です。

ある楽観主義者が言います、「美徳の方法を発見しようとして頭を絞っている間に、もっと大きな美点が自然に何事もなく導いて行ってくれます。高等動物が達した点や能力や、その構造の巧妙な複雑さが如何なるものかを見て下さい」。恰も高等動物が進化したのは、環境に合わせて自然に進化出来るが如くです。つまり、「進化は次第により良いものになっていくのです。先ず、孤独な人間は社会的人間によって潰されました。次に、集団は敵味方で戦いました。そして、勝ちを齎すのは何時も精神力です。そこから私（楽観主義者）が理解するのは、人数が同じ軍隊であるなら、勝つのは最も勇気があって規律があり、他人のために自分の人生を与える気持ちを持っている人の数によるということです」と楽観主義者は続けて言います。

従って、人間の社会においてはエゴイストたちは虐殺されるか奴隷になり、他人のために寛大な者が支配者になり、「規則を、節度、簡素、大胆、尊敬、従順へ高めました」。子供は父親の経験を利用し、母親自身は子供たちの心を高潔である様に鍛え、必然的に子供たちは最良の未来へ行くのです。この楽観主義者にとって、人間はまさに時間と共に進歩して行くのであり、最新の姿である現代人が最も進化した人間ということになります。この観念は、実を言うと私たち現代人には根強く温存されています。昨日よりも今日、今日よりも明日はもっと良くならなければならない、という考え方です。〈日進月歩〉という言葉が大好きです。科学技術の発展が、人間そのものの能力や思想の進化と混同して仕舞うのです。列車で東京から大阪へ行くのに十時間かかっていたのが六時間になり、今では新幹線で行けば三時間もかからなくて行ける様になりました。将来はリニヤモーターカーで飛行機並みに一時間で行ける様になるのでしょう。しかし、それが果たして進化でしょうか。果たして〈最良の未来〉でしょうか。

アランは答えて言います、「〈自然〉には気を付けなさい。譬え自然が長く此方側で眠っていたとしても、反対側でも横になっています。国民は美徳によって保つのであり、それは良いことです。その様にして力を手に入れます、つまりローマ人が見てきた様な平和です。しかし、成功はまさしく彼らを堕落させます。そこには富と平安があります。軍人精神を少しは必然的に忘れることにならないのでしょうか。彼らは最早、畑にいるように生きて行きません。饗宴や音楽や大変長い夜会を覚える様になります。彼らの子供たちはもっと悪くなるでしょう。〈野蛮人〉は殆ど躾が教えられていない別の美徳と、がさつな戦争の女神を彼らの馬の尻の上で齎すのを私は以前聞いています。恐らく奴隷に舞い戻ることなく、完全には乗り越えられない段階があります。大変な悪人が勝利者になれるのです。大変な美徳の人も同じ様に勝利者になれるのです。海の潮の波を見てご覧なさい。毎日、高くなり低くなって何世紀も続いています。あなたが進歩と呼んでいるのは恐らく、上げ潮でしかありません。満ち潮の後は、引き潮です」。

明らかにアランは、右肩上がりの進歩という思想を信用していません。海の潮の様に人間は〈毎日、高くなり低くなって何世紀も続いて〉いるのです。人間は科学技術の様に、毎日確実に進歩して行きません。地球が自転して夜になったり昼になったりする様に、同じことの繰り返しの

中から平和を手に入れますが、それは堕落に繋がることもあり、〈そこには富と平安があります〉。裕福な者たちは最早、畑を耕して収穫する喜びを放擲します。怠惰な生活が高貴であると錯覚します。まさに人間として真の喜びを喪失した生活です。自らの意志によって主体的に生きて生活することが不可能になり、子供たちは野蛮人と同じで、継続した美しい身振りである躾とも無縁になります。つまり野蛮人や幼稚な人間でも勝利者になれる社会が形成されて行きます。就中、〈大変な悪人〉が勝利者になれる社会が形成されて行きます。

例えば、憲法を遵守しなければならない為政者が、権勢にものを言わせる強国のお気に入りになろうとして、憲法解釈の変更という姑息な手段で自国の憲法を都合良く運用する者が勝利者になる社会も、その一つと言えそうです。まさに〈大変な悪人〉であり、怪物と化した化け物に成ろうとする者でなくて何でしょうか。集団的自衛権を可能にしたいのなら、その正当性を説明して、改憲のために必要な所定の手続きを取ってしかるべき者に認められた後に運用すべきものであるのは自明なことです。〈しかるべき者〉とは、改憲の場合は国民が該当するのは当然であり、憲法第九十六条に定めた国民投票が行われてしかるべきであると思料されます。因みに、その条文は次のとおりですが、これらの手続きがとれないのなら、憲法は〈絵に描いた餅〉に過ぎなくなるでしょう。

「第九十六条　この憲法の改正は、各議院の総議員の三分の二以上の賛成で、国会が、これを発議し、国民に提案してその承認を経なければならない。この承認には、特別の国民投票又は国会の定める選挙の際行はれる投票において、その過半数の賛成を必要とする。」

最終的に憲法改正の判断は、国民投票という形で国民が直接行うものです。従って最終的に国会や政府が判断すべきものでないのは明白ですから、仮に「安全保障関連法案」が国会で可決されて施行されても、この法律が合憲であるか否かを最高裁判所が速やかに判断すべきであることは必定であると思われます。何事も、満ち潮のように押せ押せでごり押しした後には、引き潮のように冷静に反省すべき時がやって来るものです。（完）

百四　移住民

アランが十年前に、ある弁護士の講演を聴いた時の思い出を書いています。〈ユマニテ（人間性）〉についての話が次々に泉のように続きましたが、何を言いたいのか、何を立証したいのか分かりません。そのうちに移住民たちについての話になりました。
「彼（講演者）は放浪生活、羊の群、乾燥した平原、冬、夏のことを語りました。風、草、水の流れ、四季に従って人々は生活し、生きて行くのでした。彼も同じでした。聴衆も生きていました。彼らは勉強するためにそこにやって来た律義な人々でした。
移住民たちは、私たちの様には生きて来なかったと良く考えられています。彼らには、市民権、法律、警察、町、商業、工業もありませんでした。彼らは移住していたのであり、全てがそれで言い尽くされていました。ステップの高原で、地表が露出した荒涼とした大地の儘で、彼らは生きて行きました」とアランは、一九〇八年五月二六日のプロポで移住民について書いています。
ステップの高原を移住して生活している移住民たちには、家族以外の人間への働きかけは殆ど皆無に等しいのです。弁護士の様に、人間を相手に立証することもありません。つまり移住民が相手にしているのは自然であり、事物です。羊の群も自然に含まれるものと見做せますし、人間を相手に労働することはありません。この儘では社会も文明も稀薄になりますから、誰もが変化を考えます。移住民たちには定住することが求められます。放浪者が放浪を止める時です。「移住者たちは定住する時が来たのです」とその講演者の弁護士も、勇気を奮い起こして言いました。「聴衆はそれを聞いてほっとしました。新しい時代が始まって、文明が生まれて来るのは確かでした」とアランも書いています。定住すれば、人間と人間の接触が生まれます。人間と人間との関係が構築されます。そのことは文明には必須の様です。放浪する者たちからは文明が生まれないのかも知れません。些か時代遅れになりつつある歴史観かもしれませんが、メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明・黄河文明という世界四大文明も、確かにその土地に定住した者たちによって生まれています。放浪する者には、辛うじて孤独な文化しか生まれないのかも知れません。
それでは、人間がいれば文化もあると言われていながら、何故その文化が文明という社会性や集団化に沿った優位性を獲得して発展し得なかった場合があったのでしょうか。歴史の敗者になって、勝者になれなかったのでしょうか。その点については、二〇世紀末になってジャレド・ダイアモンドが『銃・病原菌・鉄』を書いて詳細に検証していますが、やはり定住化の問題を指摘しています。人間たちが定住するには、食料になる植物を栽培したり動物を育てたりしました。更に、大量の植物を育てるために野生種から飼育栽培種に改良しました。同様に、大量の動物を養うために家畜化し易い動物を選定し改良する必要がありました。やがて大量に生産することによって貯蔵が可能になり、文明の発展に寄与したのは自明です。因みに、世界三大穀物とは米・小麦・トウモロコシであり、大型草食動物の家畜としての「メジャーな五種」とは牛、羊、山羊、豚、馬です。
ダイアモンドの分析は、進化生物学者として世界中の地域差も含めて詳細に調査していますが、いみじくも凡そ百年前でありながらもアランの視点にはその先見性があったと言えます。同様に、ダイアモンドの叙述に触れている中でアランの先見性を言うなら、車輪の発明です。人類

の特筆すべき発明としてアランは、梃子や滑車と共に車輪を屢々挙げています。ダイヤモンドによれば、車輪は紀元前三千年頃に西南アジア付近で発明されたとのことです。時間が経てば人類は色々と工夫して、快適な乗物に改良して来ましたが、その基本的な車輪の原理は依然として現代の乗物の主要のものに変わりありません。自動車のタイヤや列車の車輪以上に経済的で効率的な現実的部品が無いのです。紀元前三千年前から人間の思考は殆ど変わりないことになる事例として、アランは良く引き合いに出しています。機械や道具の発明は、その知識の蓄積が可能ですから長い時間の中で改良を重ねて行けば、確かにより良い物を産み出すことになりました。それを進化と形容する人もいます。しかし、一人ひとりの人間の思考や表現などの能力が進化しているのでしょうか。現代の思想家は、古代の思想家よりも進化して優れているのでしょうか。アランは少なくとも否定的です。

従って、アランは古典を読むこと、それもその儘そっくり全てを読むことを勧めています。思想の要約書だけを読んで理解したつもりになっている愚行を指摘します。何故なら、少しでも速く走る列車に乗って目的地に到着することが、思想の目的では無いからです。早く着いた人間は何をするのでしょうか。余った時間で本を読むのでしょうか。それなら列車の中で読んでも構わない筈です。勿論、人と会う約束の時間を早める利点もあるでしょうが、その代わりに失うことも多くあるとアランは言います。速く行くことばかり考えないで、ゆっくり行くこともエネルギーの消費が少なく済むから大切であると言います。まさに現代社会におけるエコロジーの考え方です。

列車を動かすための基本的な考え方は、つまり車輪の原理は紀元前三千年と変わっていないのですから、古代の人々の考え方にも現代人が参考に出来るものは幾らでもある筈です。そのためには腰を落ち着かせることが肝心であり、移住民の儘であってはいけないのかも知れません。「人前で話すのが全てであるあなたは、移住民たちを信じてはいけません」と言って、アランはこのプロポを結んでいます。（完）

百五　猫と鼠

猫と鼠についてアランは二幕物の芝居を書きます。幼稚園の運動場でのお話です。第一幕は次のとおりです。数日前から鼠が出る様です。管理人は町へ鼠捕り器を求めに行き、それを園内に仕掛けて鼠を捕まえました。すると本物の鼠を見ながらの授業が行われました。男の子たちには鼠の足、鼠の尻尾、鼠の眼という名前が付けられたり、そして他の動物の名を言う様に質問され、二十日鼠、猫と言いました。次は、ａの文字のつく言葉を言う様になりました。買い物籠（abas）、オーヴェルニュ地方（auverbnat）、足跡（pas）、食事（repas）、ヌガー（nougat）、背教者（renégat）の様な言葉です。そうして次には野原（prè）の様に一音綴の言葉です。巣（nid）、狼（loup）、馬鹿（sot）、円（rond）、皿（plat）、水差し（broc）があります。「要するに、その授業は授業としては馬鹿げています。只、単に動いている鼠がいて、皆が見ているだけです」とアランは一九〇八年五月二八日のプロポに書きます。

「そこへ不意に来たのが、管理人が連れて来た元気が良い猫です。右へ行ったり左へ行ったりして、匂いを嗅いだり聞いたり見たりしています。鼠捕り器と鼠に気付いて、腹這いになって待ち伏せます。その時、全く偶然に鼠は走って叫び始め、猫は孤立した兎の様に逃げ出します。鼠の授業はそれで終わりです。」

次は第二幕です。この幼稚園の教育内容について視察に来た検察官の話です。少し長いですが、面白いのでその儘引用します。

「視察官は、一生懸命に全精力を使って小さな子供たちに話をさせます。「さあ、巻き毛の君、鼠とは何ですか」。その子供は天井を見ています。「鼠が何であるか君は知らないのかい」。その子供は隣の二人を見て、にこやかに笑っています。「さあ、答えを助けてやろう。鼠は、ど…」。その子供の顔に皺が寄ります。「鼠は、どう…」。子供は別のことを考えます。「鼠は、どうぶつです」。そして、次から次へ質問が続きます。「それは大きいですか、小さいですか。何を食べて生きていますか。鼠の敵は何ですか」。「猫です」と誰かが言います。何故なら猫と鼠については、子供らしいイマージュと話があるからです。

「よろしい、さあさあ、猫と鼠が出会っているのを想像してみましょう」と検察官は言います。「何事もなく済むでしょうか。どちらかが怖がるでしょう。さあ、栗毛の坊やよ、怖がるのは猫ですか、鼠ですか」。「猫です」と子供は迷わず答えます。検察官は微笑します。「さあ、落ち着いて考えてご覧、坊や。はっきりと私の質問が分からないのだね。どちらが怖がりますか。さあ、赤毛の坊や」。「怖がるのは、猫です」。

視察官はそれ以上言いません。しかし、帰りがけに女性教師に言ったことは、猫についての授業がきちんと行われていないのは初めてのことである、ということです。「お嬢さん、イマージュと話だけでは経験に代えられないということは証明済みで、はっきりしていますよ」。」

実際に、鼠から猫が逃げ出して行くのを目撃している子供たちにとって、猫と鼠が出会って怖がるのは猫だったのですから、決して答えは間違いでなかった筈です。ところが検察官にとって、猫は鼠よりも強くなければなりませんでした。検察官の頭の中は、抽象化され、ステレオタイプ化されて固定化した答えしかなかったのです。現実は、数学の様に決して抽象化されたもので

はありません。最も抽象化された学問領域である数学は、＜一足す二は三＞である様に、答えは常に一つです。しかし現実の答えは、〈イマージュと話〉に抽象化されずに、一つではないことが沢山あります。検察官にとっての経験は、まさに〈イマージュと話〉によって抽象化された偽りの〈現実〉でしかなかったのです。縞馬が、百獣の王ライオンと戦って勝つこともあるのです。それが現実です。従って、猫が鼠の前から逃げ出すことは十分にあり得ることです。

ところが、あらゆる事物や人間の状況や現象を理解しようとして、現実を数学の様に抽象化し普遍化しようと努めます。そこから知性による誤謬が発生して来ます。社会学の創始者と言われているコントは、最も抽象的な学問領域の数学から、次第に現実の領域が色濃くなっていく六つの学問領域を指摘しました。それは数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学の六つです。このコントの見方を援用してアランは、人間の知性による誤謬を指摘します。

数学は現実の複雑な影響を受けることが全くありませんから、人間が知性によって理解する上では極めて明瞭であり、容易でもあります。数学の考え方に基づいて、あらゆる社会現象や社会状況を数式や定理に押し当てれば、社会全体が理解出来ると錯覚します。あるいは例えば、生物学の仮説であるダーウィンの進化論を持ち出して来て、環境に対応して変化しない生物は絶滅するから、社会制度も時代と共に進化して変わる必要があると主張する政治家がいます。生物学と社会学を混同しているのです。現実の社会はそんなにも単純ではありません。況(ま)して進化論を短絡的に信じて社会制度を変えてばかりいれば、良くなるものも、人々が疲弊して悪くなることは十分に考えられます。何故ならダーウィンが『種の起源』で論述している時間は非常に長く、政治家が論じている様な短い時間の話ではないからです。知性に騙されてはいけません。長い時間をかけて生まれた結果を、恰も短時間にすり替えて可能にしようとする意志には、明らかに重大な誤謬が含まれていますし、庶民という国民を欺こうとする為政者の悪意すら感じられます。

あるいは自国の領土を越えた軍隊は、上官の命令に従う必要が無い様にすべきであると主張していたアランにとって、第一次世界大戦に参戦しながらも、軍隊とは実質的にあくまで防衛のみのためのものでした。従って、自国領土以外の地域が主な活動場所となる集団的自衛権の考え方は、現実の防衛方法の思想を越えた抽象的なものに違いなく、多くの誤謬が含まれているに違いありません。絶対的に力を持っている様に見える数学の真理を、全ての学問領域に適用させるには、十分に吟味しなければなりませんし、必ず節度が必要になって来ます。全ての鼠は、全ての猫に決して逃げ出す訳ではないのです。社会の真実には必ず節度が必要です。（完）

百六　ブリドワ判事

ブルドワ判事は、フランソワ・ラブレー（一四八三？～一五五三）の第三之書『パンタグリュエル物語』の三十九章から四十四章までの中で述べられている人物です。ブルドワは長年に亘り判決を骰子の目で決めていたのです。原告にとって自分に有利な判決になるかならないか、全てはブルドワの骰子の目にかかっていたのです。「私（アラン）は考えれば考える程、ラブレーが話しているブリドワという名の判事に感心します。彼は訴訟手続きの金額が巨額であった時は、骰子一抛で裁判を終えていました。

彼は骰子に従っていました。そして、それが大変に合理的でした。各々の法律が何時も明確であるなら、決して訴訟することもないでしょう」とアランは一九〇八年五月三一日のプロポに書いています。

訴訟になるのは、それに関係した各々の法律が明確でないからです。何故なら明確であれば、何も裁判をして争う必要はないからです。法律に書かれている様に事は決するからです。ところが甲にも乙にも言い分があって、どちらも自分の方が正しいと判断する余地があるから訴訟が開始されます。そして、裁判を終える上で何が重要と判断する要素となるか、それも人間によって区々なことは十分に考えられますから、訴訟の内容が複雑になればなる程、あらゆる判決が可能になります。自分の将来を占い師に占って貰う様な時に酷似します。現実の世の中は複雑であり、色々な事が起きますから、占い師は何を言っても当たります。但し、明確な時間を定めれば、殆どの占いは外れます。仮に二〇一七年二月十六日に富士山が噴火すると占ったとしても、その占いは殆ど外れることでしょう。

しかし裁判の場合は、時間を定めない占い同様に、如何なる判決も当たりなのです。甲の言い分を採用しても当たりであり、乙の言い分を採用しても当たりです。各々の言い分にはそれなりの道理があるのですから当然です。

ところが骰子一擲で結論が直ぐに出ても、判決までには長い時間を掛けなければなりません。骰子で即決出来ても、書類と時間は必要である、とアランは次の様に書きます。

「ブリドワは言います、「書類は必要ないが、時間と費用は大いに必要だ。訴訟したい人々の権利を十分吟味する前に、訴訟したい人々のことを全て考える様になるからだ。もしも訴訟に勝って、示談よりも費用が高くならなかったなら、誰もが訴訟したがるだろうし、全ての事件が保留される。私が遅くても、それ故に大変に要領が良いのだ。今回も使用した時間は、節約した時間である」。

以上はブリドワが言っていることです。しかし、そう言うのは大変慎重です。そのことは制度に反することになるのでしょう。いいえ、違います。彼は口頭弁論の時に眠っていて、もう何も聞こえなくなると目覚めて、両眼を擦って骰子を振ります。以上が真相です。出来る人は骰子をしゃぶって下さい。

すらりとした優雅な蜻蛉のように、彼は水面をあちこち飛び回る冷やかし好きであることを忘れません。ラブレーの皮肉の門は、小石のように底まで行くのです。」

以上の様にして、アランはこのプロポを結んでいます。長い時間をかけてから骰子を振るのです。訴訟して判決するまで行くには、もっと長い時間がかかりますし、書類も沢山必要になります。つまり骰子を振って示談で収めれば、訴訟する両者にとって〈要領が良くなる〉し、時間

も節約出来ます。訴訟した人々は、最後の判決を望んでいるのではありません。そうではなくて、所謂決着すること、白か黒かを裁判所に望んでいるのです。更に、それは公平でなければなりませんから、困難を極めます。何時までも決着が付きません。結果的に骰子で決めることが最も公平である、とブリドワは言っているのであり、「ラブレーの皮肉の門は、小石のように底まで行くのです」。それが真実の重みになるのですから、訴訟する人々に対しては〈真相〉を明かす訳には行きません。

そこにある皮肉は、何も裁判に限ったものではありません。政治においても然りである様に思います。白であろうと黒であろうと、どちらかに判断することが〈要領が良くなる〉のです。例えば集団的自衛権を認めた安保法の改正についても、真に正しい判断でなくても構わないのです。正しい判断には、書類が少なくて時間が短いことが重要になります。民主党が政権与党であったなら、なかなか結論を出さないために、恐らく国民投票という判決まで進むことになるかも知れません。大量の書類と長大な時間が必要になり、骰子を振る好機がなくなります。

権力を持っている与党の政治家は、政治とは判断力である、と良く言います。判断した内容が公正で正しいことか否かを、殆ど明確に説明しません。憲法違反であるとかないとかを問題にしません。決まったことが正しいことである、という逆説を生きねばならないのです。ところが政治家たちは正しいことを決めたが如く発言しますし、自らにも納得させています。誠に笑止千万ですが、そのことを予感していますから殆どの政治家は自らが決めたことを修正しませんし、その結果についても責任を持ちません。間違っていたことを修正するのは権力の中枢にいる者ではなくて、野党の者であり、地方の者であると言われています。恰も明治維新は徳川幕府の中枢の者ではなくて外様の薩長の者たちによって行われた様に、あるいは産業革命がロンドンではなくて地方のマンチェスターから起こった様に、修正する行為は権力の中枢から始まることは少ない様です。（完）

百七　ソルボンヌ大学生

歴史とは、年代だけ理解して済むものでないのは明らかですが、それは過去の時間を現代の時間に置換して思考するものの様です。従って、仮説の上に仮説を構築して行く様なものであり、「新しい記録を作る方法が重要である」とアランは良く言っている、というソルボンヌ大学生の話から一九〇八年六月一日のプロポは始まります。

「先日、ソルボンヌ大学生が私（アラン）に苦労話をしました。彼は私に言いました、「七十四人の歴史の教授たちはそれまでの過去の時代の記録を壊して新しい記録を作る方法が重要である、とあなたは良く言っています。しかし、あなたは歴史家たちという大集団のことを忘れています。彼らはフランス語、ラテン語、ギリシア語、ドイツ語、英語あるいはイタリア語を教える口実の下に今まで歴史を作り、作者たちの詳細な人生を語り、ラシーヌの洗礼場面の台詞を重々しく読み、あるいはゲーテが創った両親の結婚場面を読んで、彼ら作者たちの作品は除いて、作者の全てを一言で認識しています。歴史という害虫は、思想の崇高な制度まで囓ります。昔は人が語る時、青春を説明するためにプラトンやデカルトやスピノザの理念を語る人間がおりました。今は最早、説明されることはありません」。

要約して一言で言う行為に思想はありません。私たちはアランが言う〈青春〉と、歴史学者が言う〈青春〉との間に大きな相違があることを予感します。つまり同じ言葉を使用しても、全く別なものと理解することは沢山あるのです。歴史学者たちは〈プラトンやデカルトやスピノザの理念を語る人間〉でないのは明らかです。何故なら、現代にはプラトンやデカルトやスピノザがいないからです。歴史学者たちにとってプラトンは歴史にならないのです。歴史学者たちは「同一作品の出版者の違いを比較して満足したり、蝶のコレクションを見せる様に色々な出版社のものを見せてくれます。彼らが文学に手を染めるや否や、精神のことが全然思考されていないと皆から言われます。かくして彼らは勉強して、出版社や序文や注解を綿密に調べます。カードを作り、そして私たちに書き取らせます。私たちの精神を形作るために、彼らは私たちにカードを作らせ、私たちも又作ります。今、私はカントの哲学を論じている全てのフランス語の本の表題と出版日を研究することになっています。図書館司書の仕事です。そして、もしも私たちのうちの誰かが、時に何らかの強力な原則を説明しようとすれば、最悪の意味がなくもないことを彼らは講壇の高い場所から言うのです。〈それ故に、現代の精神の習慣や観念と共に、二世紀も昔の形態を理解しようとしてはいけない。理念は歴史的事実を生む。何も削らず、何も加えないで、その儘で理解しなければならない〉。以上は、私たちに配られた知性のパンであり、私の理解力は小さな紙で一杯です。私は登録されたアカデミー会員の如く、二十歳の老人なのです」。

従ってソルボンヌ大学生は、思想に触れることも無く、図書館司書のような仕事しか出来なくなって、不平を言い、そしてどうすれば良いのかアランに忠告を求めます。アランは冷静に言います。

「それは大変簡単です。そこの歴史家たち全員に非難の声を上げなさい。大声で考えを言いなさい。あるいは最善なのは、彼らがあなたを排除することで、あなたは会計係とかセールスマンになることです。あなたは直接見て、物事や人間を知るでしょう。あなたは物を売ります。物を買います。あなたは夢中になります。あなたはエジプトのファラオの歴史をたどたどしく読む代わりに、今日の歴史を生きます。他のことに関しては時折、私を見に来るでしょうし、私は序文

も伝記も注も解説も無い美しい本をあなたに貸すでしょう。かくして生きているものと永遠なるものとの間で、あなたは人間として立派な人生を送るでしょう」。

それに引き替え歴史学者の仕事は、毒にも薬にもならない些細な〈新事実〉ばかりに価値を置く、学問のための学問になり、例えば学位のための学問になります。観念も思想も無い事実の収集家になるばかりですから、人間を知ることが無く、人間としての魅力が無くなります。つまり、譬え歴史上の大発見をしても、機械が発見したが如く、そこにいるのは大人になり切れない〈二十歳の老人〉なのです。真に現代に働きかけるのは〈会計係とかセールスマン〉です。何故なら、彼らは〈直接見て、物事や人間を知る〉からです。ここにアランの思想があります。抽象から具象へ行く時には必ず抜け落ちるものがあり、具象を把握することが真実への道であるという思想です。従って、数学の定理に倣って現代社会を予想しても、必ず抜け落ちるものがあり、定理通りの社会になるのは不可能であると断言出来るのです。（完）

百八　不況

アランが語る経済の話は、数式を見る様に理路整然としています。勿論、経済は社会学の一つと言えますから、数学とは異なります。しかし、一つ一つの事例を積み上げて行くその方法は、社会の現象を数学のように理解しようとします。つまり独断と独創を出来るだけ抑えて、文学的芸術的思考から乖離しようとしています。何故なら、経済とか社会学というものは、誰でも出来るだけ多くの人々に理解させるのを可能にすることが真実への近道でもあるからです。そして実際の状況は実生活に直結しますから、深刻な場合も多くあります。

例えば一九二九年十月二四日の木曜日にニューヨークのウォール街で株価が大暴落して、その後の経済活動が大きく落ち込み、世界的大不況の引き金になりました。所謂「暗黒の木曜日」です。あるいは一九七三年十月に、中東戦争により日本向けの石油輸出が削減されるとの通告があり、狂乱物価と異常インフレが起きました。又、同じく我が国では一九九〇年二月から、株価の暴落から始まった「バブル崩壊」の長い不況が始まりました。「空白の十年」という不況ですが、その影響は現在も続いていると言う人もいる様です。不況は仕事が無くなって失業者が増大しますから、不幸も増大する深刻な事態です。多くの経済学者がその理論を確立しようとしていますが、やはり数学の様な絶対的な真実は未だ無いのではないでしょうか。しかし、「暗黒の木曜日」の二一年前の一九〇八年六月三日に、アランは既に経済の基本的なことを表している「不況」という興味深いプロポを書いておりますからご紹介します。

「少なくとも振り子は大変に単純な器具です。私は糸に重りを付けます。その重りを右の方へ持って行き、そして動かします。その重りは平衡点に達するとだんだんと速くなって弧を描いて落下し、中心点になると最早落下せずに軌道に乗って反対側に再び上昇して、推進力が少しずつ使われて停止し、そして再び落下します。それらの動きの中に、大富豪と極貧の間を絶えず揺れ動きながら、私たちが何時も目標を乗り越えさせる社会的力を把握しなければなりません」。

人間社会は停止することがないとアランは言います。海面が波で揺れている様に、動いているのです。あるいは振り子が行ったり来たりする様に、動いているのです。そうしてその動きの中から、大富豪と極貧が生まれます。私たちは社会の目標を何時も達成させる社会的力を把握しなければならない、とアランは言っています。

この〈社会的力〉の一つが経済力であるのは間違いないと思います。人間が生きて行くには経済力が必要ですが、そのために全ての大富豪を無くせ、と暴力的な革命家の様なことをアランは言っておりません。大富豪は振り子が動き続けるためにも必要なのかも知れません。勿論、振り子の動きが速くなって、その揺れが余り大きくならない様にすることです。海面の波の上部と下部が大きくならないことです。大きくなれば糸が切れて揺れが停止するかも知れませんし、嵐になって船が転覆するかも知れません。大不況となって、社会不安が広がらない様にしなければなりません。

「この気が狂ったような注文は生産を動かします。資本が提供されて利益が生み出されます。工場が建ちます。工作機械が唸り声を上げます。誰もが急ぎ、前年の注文に釘付けになります。従って、注文は最早増えなくなって、生産が落ちます。注文が再び増える時は、既に生産が減っています。皆に供給されるまさにその時に掛けで売り始めますし、あるいは割引が大きくなって生産すれば損失が出る様になります。その時は値引き販売から競り売りに変わります。利益は小さ

くなります。資本金や余った財産は別の物に使われるようになり、生産者は沢山の機械を持つ様になり、現金が足りません。今は、景気の波の谷にいるのです」。

かくしてデフレとなり、不況が訪れます。金融緩和にして現金を沢山供給しますが、なかなか〈社会的力〉が不足して、元の揺れに戻りません。

「如何に世界全体の事柄が同じ種類の法則に従っているのかを理解しなければなりません。景気が上昇している時期がありますが、その時は物の値段が全て上がります。それは自明のことです。沢山稼ぐ人は、沢山の物を買います。その上、値上がりは購買力を落とします。というのも人々は自問するからです。明日はもっと高くなるだろう。結局、高くなった物ばかりを買ってお金を支払う労働者は、もっと高い賃金を要求し、そのことは原価を高くします。値上がりは値上がりを生みます」。

皆がお金を沢山稼げば、お金を沢山使いますから皆が満足して、波は上昇しますが、やがてお金が不足して来ます。「手形を軽率に切って破局を迎えます」。破局を迎えないようにするためには手形を切ったり借金したりしないことです。自分が自由に使える資力の中で揺れることです。従って「けちであることと、慎重であることが、そこで叫ばれて、購買は少なくなります。売って稼ぐのも少なくなります。お金は一方に詰め込まれ、他方に利益が生じます。値下げは購買力を妨げます。何故なら誰もが自問して迷っているからです。待ちましょう、明日も未だ高くならないでしょう。値下げは値下げを生みます。皆の稼ぎが少なくなり、お金を使うのも少しです。皆が不満です。ギリシア神話のカッサンドラは戦争を予言します。そして、セレブロフは〈現代意識の不安〉についての本を書きました」と結んでいますが、結果的にアランは戦争や大不況を予言したことになります。

重要なことはアランが予言したことではなくて、戦争や大不況を防ぐことです。そのための方法を、残念ながらアランは明確に語っていませんが、自ずと推測することは可能です。経済の揺れを大きくしないことです。もっと具体的に適切に言うなら、大富豪と極貧の差を大きくしない政治力と文化力が必要です。世界で最も裕福な大富豪六二人（数年前は三八八人であった）と、経済的に貧しい下位半分の三六億人の総資産が殆ど等しいという状況（国際ＮＧＯ「オックスファム」）を、もう少し良識的なものに変えなければなりません。それを可能にするのは、上位の六二人でもなく、下位の三六億人でもないでしょう。彼らには困難なことでしょう。何故なら、現状を変えなければならない勇気と過酷な努力が余りに大きい当事者に該当するからです。戦争や大不況を回避するためには、残りの上位半分の三十六億人の力が必要であり、それは私たちの責任ではないでしょうか。小さなことで良いから出来ることから始めることです、とアランなら言うでしょう。（完）

百九　自由意志

　哲学とは、ご存知の様にギリシア語で〈智を愛すること〉であり、愛智であると言われていますが、そのためには人間の自由が必須でもあります。自由に思考出来なければ真実も把握出来ません。例えば政治には奸計が必要であると人に言われてその儘に認識すれば、奸計を巡らすことが政治の実体になるばかりです。ここには自由に思考する方法が蹂躙されています。アランは、「自分が思考の主人であるか否かを先ず知らなければなりません。それというのも自分が思考の主人でなかったなら、取り返しがつかないからです」と、一九〇八年六月九日のプロポに書きます。教育は、自ら思考する術を知る行為かも知れませんが、それと共に他者の思考を模倣する行為が前提にあるためでしょうか、「文化とはまさに教育とは別のものです」とアランは『神話序説』（一九四五）の中（第二章の九）で言っています。アランの言葉は色々と誤解を生むことが多いのですが、この言葉も取分け教育関係者には誤解される様に思われます。しかし、教育に文化があると考える教育関係者がいるとすれば、益々教育に文化が無くなる様に思われます。何故なら文化とは、まさに自らの思考を耕す行為であり、自ら活動し創作する行為であるからです。決して他者に教えたり、他者を動かし育てる行為ではないからです。そのためでしょうか、アランは教職に身を置きながら、生涯に亘って著作活動を継続して、文化活動を維持していました。

「それ故に、私は自分で出来ることをしようと思います。私は満月のことを考えたいと思いますし、そして考えます。インドのフランス自治領ポンディシェリーのことを考えたいと思いますし、そして考えます。私は貨幣の流通や為替相場のことを考えたいと思いますし、そして考えます。この様にして私の思考は主権者になります。それは大地や大空を踏破します。自分の足で立ち、自分で飛び立ち、小鳥の様に自由です。人は私の手を縛ることが出来ますが、思考を縛ることは出来ません。私を監獄へ入れることが出来ますが、私の思考は監獄から脱出します。私の思考は自由です」。

　教育は文化で無いと思考する者にとって、誠に美しい言葉です。他者が出来ることを他者に教えるのではなく、「自分で出来ることをしようと思います」と思考する者に教育者でいることが出来ません。何故なら、最も誠実で真摯な教育者は自己を放擲した者でなければならない筈であるからです。僧侶や司祭という職業が人間の死を扱うように、判事は犯罪を扱い、医師は病気を扱います。これらのいずれの職業も人間の悲惨や苦痛を扱いながらもそれらを超える処に崇高さがあるとするなら、教師は人間の愚かさを扱いながらも英知へ導くのですから、やはり崇高な職業と言えます。職業が崇高であるためには、人間の悲惨や苦痛や愚かさを伴う必要があるのかも知れません。しかしながら、教育における思考の内実は教師には稀薄であり、行為する主体は生徒にありますから、教育は文化とは〈別のもの〉になって来ます。教育は、独創よりも永遠の真理を求める行為を重視します。つまり教室の中には、独創的な詩人や小説家がいなくても構わないのです。何故なら教育はそういう人間を求めていないからです。

　従って教室の中で自由に思考することは不可能であるとも言えます。「私の思考は自由ではありません。私の観念というものは数珠の珠の様に繋がっています。私が満月のことを考えたのは、三日月を見たからです」とアランは言って、アランが思考した観念は自由に選択したものと仮定したとしても、「その観念と前の観念には何らかの結び付きが何時も見付けることが出来

ます」。そうであるなら自由に思考することとは不可能ではないか、とアランは言います。何故なら、三日月の観念は満月の観念に結び付いているのであれば、自由でなくなるからです。

しかしアランは「止まれ、そうではありません」と言います。「もっと正確に言いましょう。私は中国のことを考えたいと思います。それが良く意味しているのは何でしょうか。確かにそれが意味しているのは、私が中国のことを考えることです。それを考えることもなく物事を考えたいと思うことも出来ません。それ故に先ず中国のことを考えたいと思い、そして次に考えるということは不可能です。私の意志は私の思考に続きます。それ故に思考が浮かび出る時は、思考が浮かび出て欲しいという考えが浮かび出るからではありません。かくして私の意志は、思考について何も出来ないのが確かであると思います」とこの疑問は解決したと書いてアランは眠りに就き、このプロポも終わります。

人間は、意志が生まれて思考する訳ではありません。つまり思考するために意志を必要としている訳ではありません。感情や論理に基づいて思考することもあります。一般的には考え様とする意志がなければ考えることは不可能に見えますが、もっと正確に言うなら、思考して意志が生まれると言っても良い様です。思考は意志に関係なく浮かび上がります。従って「意志は、思考について何も出来ないのが確かである」のです。自由に思考することは自然と意志も自由になります。私の意志は自由に定められたものであるか否か、と心配する必要はありません。自由に思考するだけで良いのです。有名な『幸福論』の最後の章（一九二三年九月二九日のプロポ）で「悲観主義は気分によるものであり、楽観主義は意志によるものである」とアランは書き始めていますが、〈楽観主義は思考によるものである〉と言い換えることも可能の様です。何故なら思考することは、自由な意志を持った人間が行うものであるからです。

いずれにしても思考と意志と楽観主義は密接に結び付いているものである、と言って過言ではない様です。そのために必要なのが〈自由〉です。譬え監獄の中にあっても、アランは〈私の思考は監獄から脱出します。私の思考は自由です〉と書いて、自由な思考と自由な意志を勧めています。それは奸計によって権力を保持しようとして、放送局の電波停止を口にしたり、保身のために議会の私物化を考える政治家たちには手の届かない世界に映ることでしょう。（完）

百十　四月には薄着をするな

世界地図をご覧になればお分かりになると思いますが、東京はほぼ北緯三五度に位置しており、スペインがあるイベリア半島の南端付近と同じです。パリはほぼ北緯四八度に位置していますから、北海道の北端よりも更に北に位置しています。このことは四月になっても、フランスが北極からの寒気の影響を受けやすい理由の一つと思われます。何世紀も昔からフランス人が「四月には薄着をするな」と言って来たのも庶民の知恵である、とアランは一九〇八年六月十日のプロポで書いています。

「毎年私たちは、太陽が高く戻って来て、再び暖かくなるのを望みます。ところが日が長くなる時は、私たちの家ではまさに刺すような寒さです。そして三月二十日頃に、昼が夜の長さと同じになる時、コー地方の台地に何故冷え切った微風が吹き、河岸にも連続して降下して来てサン＝スヴェの蒸気を一掃させるのか、私たちには分かりません。

しかしながら、大地がゆっくりと冷たくなったり暖かくなったりするのを理解するのは容易です。大地と、それよりも沢山あるのが水です。そして、水の温度を一度上げるには、大地を一度上げる熱の原子量が少なくとも三十倍なければなりません。それ故に太陽光線が春になっても、地球上の春は遅いです」。

コー地方はフランス北西部にあり、サン＝スヴェはフランス南西部の町です。四月になればサン＝スヴェの町は暖かくなって蒸気が発生して上昇します。そして、そこの地表近くに北極からの寒気が這入って来ます。地理的には北方にあるコー地方は「冷え切った微風」が吹く原因になっている、とその後でアランは説明します。天候というものは日々変化しますが、地球規模で見るとかなり正確に把握出来る様です。従って、四月になっても庶民が生活する地表は、冬の時の様に寒い儘です。「四月には薄着をするな」と言われて、何世紀もの間守られて生き続けて来た庶民の知恵にアランは感心します。

ところが他方には、素直に生活の知恵とは思えない所謂〈迷信〉というものもあります。例えば「ウナギと梅干し」は食べ合わせで、一緒に食べると中毒を起こすから食べてはいけないと言われています。しかし最近初めて知りましたが、科学的には決してそういうことは無いとのことです。恐らく脂っこいウナギを食べると口直しに梅干しも沢山食べて仕舞うので、食べ合わせとして梅干しの消費を抑えたのではないかと言われている様ですが、真意は不明です。あるいは子供の頃に、下の歯が抜けたら屋根に乗せれば早く新しい歯が出て来ると言われて、抜けた乳歯を実際に屋根へ投げたことを思い出しました。これなどは何の根拠も無い迷信でしょうが、子供の身になれば大人の言うことを信じるものですから真剣でした。

しかし大人になっても、子供の時の様に信じていることが多くある様に思えてなりません。「人よりも沢山勉強して、出世して有名になる」ことが正しいことと信じている大人は沢山いると思います。確かに沢山勉強することは良いことであり、出世することや有名になることも良いことに違いありません。しかしながら勉強することと、自ら思考したり感じたりすることとは、全くの別ものであることに気付いている人は意外と少ない様に思います。勉強することとは、主として他人が思考したり感じたものの〈伝承〉に過ぎません。「伝承は肉体には為になって良いものですが、精神には悪いものです。伝承はその儘で〈歴史〉に従って行動しますが、〈理性〉に従って思考しなければなりません」と書いてアランはこのプロポを結んでいます。

従って〈沢山勉強する〉人は、少しも自ら思考しないで感じない人かも知れないのです。「何も考えない人は何も感じません」と『思想と年齢』の「疲労について」の中でアランは言っています。〈出世して有名になる〉ことも正しいことで立派なことではなく、必ずしも幸福ではないかも知れないのです。東京都の桝添前知事の様に出世して有名になっても、吝嗇家として正しく立派でない場合もあり、決して幸福でない事例にも枚挙に遑ないと思います。

つまり子供の時の真実は、大人になれば違って来るということです。「四月には薄着をするな」という殆ど変わることのない伝承の真実によって、風邪をひかないのは肉体のために良くても、鵜呑みにすることは〈精神には悪い〉とアランは言います。つまり伝承は、自然と同じ様に一人ひとりの人間の思考と感性を受け入れないからです。自然は平等ですが、人間の言葉を理解しません。翻って言葉は人を欺きますが、自然は欺きません。もしも人間の思考と感性によって言葉も人を欺かなくなれば、その時は真実の言葉になって、人間の理性を育む良いものになるのでしょう。（完）

百十一　宗教的体験

詩人中原中也は次の様なことを言っています。この世に神はいないと信じるなら、いないということを証明しなければならないが、いないというその証明そのものが神のことではないだろうか。従って神はいるに違いない、という意味のことを中也は推論しています。一般的に神は眼に見えないのですから、その見えないものを存在していると証明することは、謂わば科学的に認識しなければなりません。その証明を検証し吟味するためには、知覚と理性が必要でもあります。つまり人間の経験に頼り、その科学的な認識を当てにすることになります。神という宗教は、経験という科学と結合することになり、宗教は科学に似ていることになります。一九〇八年六月十一日のプロポは次の様に始まっています。

「私（アラン）は最近、〈宗教的体験〉についての話を聞きました。この対義結合には既に色々な意味が含まれています。それは〈宗教〉と〈科学〉が似ていることを示していますし、〈科学〉は街灯の大きな明かりを消し、〈宗教〉は豆ランプの明かりを灯します。従って、〈科学〉が歴史の中で見えなくなっている間、〈宗教〉は積極的な方法で白日の下に〈神〉を試します」。

歴史上で現代程、〈科学〉という街灯が明るく灯している時代はないと思います。しかし〈宗教〉の明かりも、豆電球でありながらも灯っています。この世には理解出来ないことが幾らでもあり、不可解なことは枚挙に遑ありません。人間の肉声が届かない遙か遠くにいても、無線電信や電話機は確実に肉声を届けてくれます。古代人から見れば、まさに奇跡です。同様に百年程前には不治の病と言われた結核も、現代医学はこれを完治させてくれます。当時の人々から見れば、これもまさに奇跡です。〈科学〉という街灯が消えれば、電話機や結核を治す薬は奇跡であり、〈神〉を見るに違いありません。奇跡は宗教を生みます。イエス・キリストの奇跡はキリスト教を生みました。預言者ムハンマドの奇跡はイスラーム教を生みました。

「無線電信によって、私たちの〈神〉は黒人の〈神〉よりも真実であると示すことが出来ます。ところで、この奇跡は何でもないことが私たちには全て分かっていることなので、タンブラーから小球を出す手品のように〈神〉を証明することは断念せざるを得ません」とアランは書きます。こうして、〈科学〉が歴史の中から見えなくなって来ると、「〈神〉を証明することは断念せざるを得ません」とアランは理解します。つまりそれは、宗教が生まれる時でもあります。但し、それは万人が理解出来る様なものではありません。それは決して知識だけで可能になるのではなく、自らの経験だけによって感受し取得されるものでもあります。神の存在を体験するのですから、そのことを他人に証明することは不可能であり、断念せざるを得ません。その様な宗教的体験をした或る信者たちについて、アランは次の様に報告していますので、少し長いですが引用します。

「或る人（信者）が私たちに次の様に言いました、「私は不幸だった。人生の悪に耐える勇気が私にはなかった。日々の労働は私には退屈で無駄な様に思えた。人間たちの悪意と不正義が私の心を押しつぶした。私はもう生きたくないと感じた。その時、良き司祭の忠告に従って、信仰と祈りと聖典を読んで瞑想する道に這入った。それ故、数日後に自我の中に奇跡が起きた。突然に、自我の中に〈神〉の存在を理解し、同時に何時までも変わらない喜びがしみ込んだ。私は恩寵を感じた。それは本当だ」

よろしい、それは本当です。そして、私（アラン）はそのことを直接見た訳ではありませんが

、本当だったと十分に認めたいと思います。だが、何を証明するのですか。はっきりしていることは、信じることは良いことであると証明することです。この信仰が何ものかに繋がっていることは、何も証明していません。病人の病気は軽くなり、パン屑の丸薬で治る様になります。そのことは信仰が胃や腸に効くことを示していますが、丸薬の中にパン屑以外のものがあっても全然証明されていません。そして最後には、幸せに違いない酔っ払いやモルヒネ中毒患者に出会うことになります。それは何を証明していることになるのでしょうか」。

以上の様に書いてアランはこのプロポを終えています。アランは決してキリスト教を否定する無神論者ではありませんが、宗教が〈幸せに違いない酔っ払いやモルヒネ中毒患者〉を生んでいる危険も指摘しています。それは神の存在を信じることにより、確かにパン屑だけで出来た丸薬で病気が治るかも知れません。確かに〈信仰が胃や腸に効くこと〉になり、幸せになることもあります。しかし、その様な宗教的体験には神の存在を信じない精神である、科学的な思考と自己を客観的に見る理性が欠如しています。神の存在を信じない精神も又、中也が言う様に神であるかも知れないのです。

いずれにしても宗教的体験には奇跡によって神の存在を信じることは必要でしょうが、奇跡を冷静に思考出来る精神を所有することと同時に、神の存在を信じないことも現代社会の宗教には必要の様に思えます。何故なら、酔っ払いやモルヒネ患者は本人自らは幸せかも知れませんが、家族を含めた社会にとっては幸福なことではないからです。そして限定された社会においての独善的な幸せばかりでは、決して社会にとっての真の幸福に繋がらないでしょう。そう言う意味で人間の真の幸福は、宗教団体にも政治団体にも無い様に私には思えます。何故なら、組織や団体に依存する人間の数が増えれば増える程、その組織や団体にとっての〈幸せに違いない酔っ払いやモルヒネ患者〉も増加するに違いなく、精神的に自主性を喪失した彼らに至っては既に至る所で垣間見られるからです。（完）

百十二　偉大な副王は腹を出して

人間が実際に感じる痛みは、他人に話しても決して理解されません。その話を聞く人にとっての痛みは、抽象的な観念でしかありません。隔靴掻痒の思いが強くなるばかりです。「せいぜい芝居を見ている様に心を動かされるだけです。如何なる言葉もその苦しみを表せません」とアランは一九〇八年六月十四日のプロポで書いていますが、その例としてガレー船のことについて触れています。

大勢の人力で海水を櫂で漕ぐガレー船は、風力で航行する帆船よりも長距離航海には不向きであった様ですが、その代わりに小回りが利いたので戦闘には向いていました。ガレー船の漕ぎ手は、中世の頃のヴェネチア辺りでは人気のある職業でした。それはガレー船を漕いで行った先で個人的に交易活動が可能であり、給金以上の利益が期待出来たことが大きな理由でした。しかし苛酷な労働であったために、やがて十七世紀頃から、取分けフランスにおいては囚人や捕虜たちが体刑代わりに漕ぎ手として利用されました。逃亡を防ぐために足は鎖に繋がれ、過労などで死ぬまで強制的に漕がされました。死ねば次の囚人が補充されました。こうしてガレー船の暗いイマージュが出来上がって行ったと言えます。

「男たちはガレー船を漕ぐ刑に服しました。そのことはあなたをびっくりさせます。如何にして彼らはそれに耐えたのでしょうか。最早簡単なことは一つもありません。彼らは腰掛に繋がれて、数か月後にそこで死にました。肌は裂け、骨が露出していました。次に別の者が繋がれて、同じ様に死にました。最も臆病な者がこの様にして死にます。最も勇気ある者もこの様にして死にます。苦痛は私たちとは関係なく構わずに増大して行きます。人間は動物になって耐えることになります」。

ガレー船を漕ぐ囚人たちには希望がありませんでした。苛酷な労働を毎日同じ様に継続して行うのですから、苦しみしかありません。同じことの繰返しは絶望しかありません。向上も発展も無いからです。「英雄とは、自ら進んで苦悩に身をさらす人のことです」が、身をさらす瞬間には苦悩や絶望を感じない様にもなります。

「そして苦悩を感じても、最早逆戻りも出来ません。そんな時の英雄は苦しみ泣き叫ぶ哀れなもので、苦しみ泣き叫ぶガレー船を漕ぐ囚人の様です。偉大なる副王は腹を出して、傷付いた動物の顔になって、その苦痛から彼は少なくとも英雄の軽率さに後悔する時間を与えなかっただろうと思います」とアランは書きます。

英雄が行動する時は後先のことを考えません。行動せずに止まって考えて過去を思い出す時に後悔する感情が起こるのです。偉大な福王は傷ついた腹を出しながらその苦痛に耐えることで後悔することがありません。〈貧乏暇無し〉という俚諺は理に適っている様に思います。考える暇が無ければ絶望しないで済むからです。しかし英雄も人間ですから、希望が無くなればガレー船の囚人と同じ様になります。ところが、幾ら苛酷な労働であっても寄港先で個人的に自由に交易を行うことが許されるのであるならば、〈苦しみ泣き叫ぶ哀れなもの〉に成ることはありません。逆に、ガレー船の漕ぎ手は人気のある職業にもなり得たのです。生きて行く上で必要な労働を職業と定義するなら、ここには職業としてのヒントがある様に思います。

つまり職業には生きて行くための希望が必要です。眼に見える成果が必要です。給金という成果が必要です。あるいは事業の完成という成果が必要です。シシュフォスの様に、永遠に山頂へ

石を上げ続けるだけの行為に希望は見付かりません。死ぬまで永遠に漕ぎ続けるガレー船の囚人にも希望は見付かりません。しかし、漕ぎ続けながら話をして、それを書き続けることが出来たなら、状況は違って来るに違いありません。言葉には不思議な力があります。書き留めることによって言葉が言葉でなくなります。あるいは文字が無かったとしても、『平家物語』を語る琵琶法師の様に、記憶として覚えて置くことによって言葉が言葉でなくなります。話す言葉は消えて行くだけですが、文字にしたり記憶に刻んで置くことで、言葉が消えることはなくなります。言葉の蓄積が可能になり、成果が生まれます。事業が可能になります。ガレー船の囚人もシシュフォスも話をした言葉が蓄積されて行ったならば、刑罰は職業としての労働に変わり、希望が生まれて来るに違いありません。

詩人が詩を書く理由もここにある様に思います。我が国の現代詩人たちは、詩を書いても殆どが報酬という給金が無いのですが、それでも成果の蓄積は確実にあります。従って給金が無くても希望は確実にありますから、詩人がいなくなることはないと思います。詩人は、給金が無くとも職業になり得る不可思議な人種です。小説家も画家も同じです。彼らの行為には、給金が無いとしても、成果があり、事業があり、希望があります。

戦場にいる兵士たちも同じです。戦勝という成果と事業がありますが、話をして蓄積されれば更に一層大きな希望になるに違いありません。

「私（アラン）は戦争のことを話す死者たちの言葉を聞きたいと思います」と書いてアランはこのプロポを終えています。因みに、アランは第一次世界大戦の戦場においても毎日の様に執筆し、ランブラン夫人の元へ郵送して多くの作品を残しました。恐怖と絶望に苛まれる戦場にあっても、まさに言葉の蓄積がある限り、希望を失うことはなかったのだと思います。（完）

百十三　ドレフュス事件とそれらの主張

ユダヤ人の陸軍大尉アルフレッド・ドレフュスが、機密情報をドイツへ流したというスパイ容疑で逮捕されたのは、一八九四年十月でした。同年十二月に、パリ軍法会議はドレフュスに終身流刑の判決を下し、翌年四月に彼は仏領ギアナの悪魔島に収監されました。その後、冤罪事件としてフランス社会を二分する大論争になったのは周知のとおりです。

破棄院から再審を命じられた軍法会議は、それでも一八九九年九月に再度有罪判決を下しましたが、大統領令で特赦になるという苦肉の策が弄された様です。そして一九〇六年七月に、破棄院は軍法会議判決を破棄してドレフュスに無罪判定を行い、彼の名誉がやっと回復されました。この冤罪事件を契機にして、フランス国内では、国家とは何か、民主主義とは何か、正義とは何か、自由とは何か、神とは何か等々の問題が盛んに議論されましたが、現代の成熟したフランス社会の基礎を作り出した様に思います。少なくとも一七八九年のフランス革命だけでは説明出来ないだろうと考えます。事実、大革命後のフランス近・現代史は王政と共和政の繰返しの歴史であり、やっとフランス社会は現代の第五共和政に落ち着いたと言えます。我が国の場合をこの様な王政と共和政の観点から見てみると、江戸幕府以後の極めて長い王政が一九四五年の敗戦と共に実質的に終焉して、やっと第一共和政の時代になったと言えるのかも知れません。勿論、現代の我が国は最早王政への逆行の道を許容出来る社会ではない筈ですが、近年は〈リーダーシップ〉を吹聴する発言が余りに目立って来たため、思想の潮流としては王政の精神が些か色濃くなって来ている気がしないでもありません。

いずれにしても、アランが一九〇八年六月二三日のプロポを書いた時は、ドレフュスに未だ無罪判定が出ていない時代であり、フランス社会の基本理念が議論されている時代でした。所謂王政派とも言える君主制擁護者たちの意見を、アランは次の様に書いています。

「彼（ドレフユス）は有罪だった。しかし、我々（君主制擁護者たち）はそれを証明出来なかった。それは国家の一大事で、全てのドアを閉めて権限のある国家権力によって、最高の権威をもって取り扱わなければならなかった。この手続きを受け入れたくなかった者たちは、国民の敵である。彼らは〈祖国〉の安全が最高法規であることを忘れている」。

これに対して共和政派とも言える民主主義者の意見を、同じくアランは次の様に書いています。

「国家権力による全ての行為は、白日の下で、点検出来るやり方で行われなければなりません。あなた方（君主制擁護者たち）は或る男を告発します。その男の証拠を握っていますが、示すことが出来ないとあなた方は言います。まあ、あなた方は中傷家なのであり、その男は無罪です。かくして私たちは無罪と中傷を明白にします。法的に事実になり得ないものは、全てが無効です。法律のこの規定を認めたくない者たちは、国民の敵です。個人の安全が最高法規であることを忘れているのです」。

最高法規は〈祖国〉の安全でしょうか。それとも個人の安全でしょうか。勿論、この問題は二者択一出来るものではありません。何故なら国の安全が確保されなければ、その中で生活する個人の安全も確立されないからです。しかしドレフュス事件の様に、個人の安全が確保されない場合があっても、国の安全のためにはやむを得ないとする考え方に民主主義者たちは我慢がならないのです。国の安全が優先される考え方とは、まるで蜜蜂の巣のように同じ形の巣が出来て行く

ばかりです。同じ形状の考え方が確立されて行くばかりです。そこには真の自由と正義が無い、とアランは主張します。

正しい考え方とは、必ず個人が思考したものの中にあります。何故なら思考は個人のものであるからです。自分で知覚して思考しなければ、正しい考え方は生まれません。思考しない者は感じることも出来ない、とアランは言っていますが、まさにそこには思考の奥義があると思います。言葉だけを丸暗記しても、そこには思考が欠如していますから、〈仏作って魂入れず〉の事態が発生します。それでは到底正しい考え方になりません。従って個人の安全が優先されない処に、正しい考え方は生まれないでしょう。新興宗教団体や政治団体が良くやる様に、組織の拡大を目的に作成されたマニュアルを信者や会員たちに幾ら唱えさせたり覚えさせたりしても、そこには〈魂入れず〉の人間ばかりが増えて行き、人間の数や多数決ばかりが当てにされます。多数決と、真の自由と正義つまり正しい考え方とは、殆ど関係が無いと理解すべきだと思います。何故なら正しい意見は、何時の時代も最初は少数意見であったからです。ここに少数意見を大事にしなければならない所以があります。従って自らの思考に基づかないで、批判精神も無く短絡的に多数決を当てにする者たちには真の自由と正義が無いと言っても過言ではありませんから、少数意見を無視する精神の傾向が強くなります。所属する団体への帰属意識に基づいた勝者の幻想のみに支配されていますから、生命への充実感と充足感を喪失した人間ばかりが平板な蜜蜂の巣の様に増大して行きます。これでは他者を刺して傷付けながら、自らも死んで行く蜜蜂の様な人間になるばかりです。君主制擁護者たちは〈人生の価値あるものを放棄している〉のであり、〈精神の眠り〉から目覚めよ、とアランは言っています。（完）

百十四　私たちは未開人の様に議論する

議論する時は思わず激しい口調になることが良くあります。議論する相手を、まるでボクシングの相手の様に倒れることを願います。つまり相手が反撃して来なくなれば、自らが勝者であるかの如く見做します。これは議論の内容においても、自らの主張が正しかったからでしょうか。果たしてその勝敗は真実のものなのでしょうか。例えばアランは、モロッコ問題について議論するフランス議会のことを、一九〇八年六月二九日のプロポで次の様に語っています。

「悲しいことに私たちは、平和について議論することさえ知らないのです。そして、討議しても既に戦闘です。この品のない言葉というものは、相手が同意したことを言うために出来る限りの大きな音を両手で立てることにあるのではないでしょうか。理性ある人間の言葉は、曲芸師がやる爪先での回転や俳優の顰めっ面の様に自然に受け入れられます。それは未開人の習慣でもあります。プラトンが強調して言った様に、もしも部屋が反響するなら、壁の石も自然に同意していることになります」。

議論することとは平和を願っているから行うのでしょうが、〈討議〉は既に〈戦闘〉のために行われているとアランは見ます。相手が戦闘に同意していることを言うために、自らは〈大きな音〉を両手で立てて議論に勝とうとします。そうではなくて、理性によって議論に勝つことが重要です。爪先で回転して後を向いたり、自分の負けを認めて顰めっ面をさせることで自然に受入れられることが重要です。それは時代の主権者とは関係のないものであり、理性ある人間としての行為でもあります。〈未開人のように議論する〉ことが重要であるとアランは見ます。

あるいは現代世界に目を移してみると、二〇一六年六月二三日に、ＥＵからの離脱を問う英国の国民投票が英国全土で実施されましたが、離脱支持が五一・九％、残留支持が四八・一％でした。しかしこの時、果たして英国国民は理性によって議論したのでしょうか。大学などでディベートが行われたことはテレビでも放映されて事実としてありましたが、この時残留支持派が勝利したとしても、その後の国民投票に生かされませんでした。〈爪先で回転して後を向いたり、自分の負けを認めて顰めっ面を〉したのは離脱支持派だったにも拘わらず、国民投票では逆に過半数を獲得したのです。まさに政治の世界は理性ある人間のものではなかった様です。従って国民投票とは理性ある人間のものではないと言えるのかも知れませんが、それでもそれが民主主義でもあります。つまり民主主義とは必ずしも正しい判断を保証する制度のものではないのです。それは少なからず歴史が証明している処でもあります。従って正しい判断をするためには、時には新聞もテレビも無い未開人の様に思考してみることが必要です。

移民の増加による英国社会の不均衡の増長と国民生活の不公平感が、ＥＵ離脱を支持する過半数の国民の感情へ収斂して行ったのではないかと思えてなりません。つまり国民投票とは、正しい判断の選択とは異質の、時には人間の感情に基づく選択に違いない様に思います。もしもこの見方が誤りでなかったなら、冷静に思考する時間を少し長く設けるべきであり、それこそ衆議院と参議院の二院制がある様に、英国は再度国民投票を行うべきであると考えます。何故なら正しい判断とは、常に最初は少数意見である場合が多いからです。その少数意見は、時間と共に人々が冷静に理性ある人間として思考し議論することで、正しい判断を選択する多数意見に達することは枚挙に遑ない位に幾らでもあるからです。

現代では歴史の誤りとして全面的に否定されているあのヒトラーでさえも、ドイツ社会におい

て最初は民主的に国民の多数決によって選択されたのです。ヒトラーの場合はユダヤ人という仮想の敵を捏造しましたが、今回の英国のＥＵ離脱も〈移民〉という仮想の敵を捏造していないか、慎重に再検討する必要があると考えます。何故なら〈排除〉の思想は必ず戦争への道に至るからであり、その反対に平和の礎になるのは〈交流〉の思想であるからです。これは歴史が証明していることです。赤組と白組に分かれれば、赤組の人々は白組の人々を排除し、何時かは必ず戦う様になるからです。同じテーブルに就いて、同じ物を食べて、同じ話題を話すことでも平和は築かれます。同じ場所へ行き、同じ勉強をして、同じ物を作っても平和は築かれるでしょう。〈交流〉は平和の礎であり土台です。平和を志向することとは、赤組と白組に分かれないで済む行為を行うことです。従って戦争を志向する者たちは必ず敵を捏造し、味方との差別化を図りますが、国内の発展と外交の進展についての有効な方策を満足に語れません。民衆の拍手喝采ばかりを求める様な政治家に騙されてはなりません。アランは拍手喝采を拒絶します。

「私は何時も或る種の罵詈雑言の様に拍手喝采は拒絶して来ました。何故ならそれは単に人の気に入られ様とすること、それに成功して満足することを思い描いていると話す者を、真に侮辱することにもなるからです。私が胃に一撃を食らった時と同様に、古くからの修辞学の法則に従って私は何時もボクサーが話す様に笑いながら「パンチに耐えること」に専念して来ました」とアランは、理性的に思考しない熱狂的な拍手喝采を否定します。〈人の気に入られ様とすること〉は、人を感動させたり納得させる行為とは無縁です。何故なら感動や納得には必ず沈思黙考が伴うからです。そして正しい意見と判断は、先ずは少数意見から始まるからです。全てが多数決によって事案を決定して行く民主主儀の社会及び政治体制であっても、そこに少数意見を尊重しなければならない所以があるのです。何故なら今は少数意見でも、やがて人々が理解し納得し賛同して、正しい多数意見になる可能性は大いにあるからです。（完）

百十五　司法調査と歴史

歴史的に見て、正しい結果は必ずしも正しいやり方によって齎されるものではない様です。裁判所には調査権がありますから司法調査により、常に正しい結果を求めなければなりません。ところが正しいやり方で行っても、必ずしも正しい結果にならない場合がある様です。従って冤罪の場合は、正しい結果を求めて、別の方法を行うことも必要です。一九〇八年六月三十日のプロポでアランは、高級将校が間違った証言により城主の息子を監獄へ入れた話を書いています。農家が燃えている所へ駆けつける人々の中で、簡素な身なりのその若者が言った言葉を高級将校は悪く解釈して監獄へ入れたのです。証人たちも間違って聞いていたのです。万事休すです。その若者は、その国の法律に従って監獄へ這入りました。

「その時彼（若者）は無駄であっても、正義の力に頼って別の方法を使いました。監獄の格子を通り抜けて、父親（城主）へ伝言を送りました。直ぐに城主がやって来て、自分で見て息子だと分かりました。その時、新しい事実の光が証言となって事件を明るみにしました。幾つもの記録が人々の眼によって読まれます。本当らしいことが議論の時に持ち出される様になります、何故なら歴史に書かれるのもその様なものであるからです」。

歴史とは、時間という篩を通過するために、議論の時に本当のことが持ち出される様になるものです。高級将校の行為は、歴史の中からは消えるべきものでした。何故なら捏造であったからです。ところが間違いであっても、歴史として残り続けることもあるのではないでしょうか。もっと正確に言うなら、現代における歴史として残り続けている捏造もあるのではないでしょうか。それこそ時の権力者や何々歴史学会の重鎮の学者が言っているのであるから確かだろう、とその学説が歴史として残っている場合があるのかも知れません。

美術界では重鎮の画家が亡くなると、その画家が描いた絵画の価格が低下する事例もある様です。画家が亡くなればその画家の絵画が創作されることは最早無くなるのですから、需要と供給の経済的法則から言えば当然に存命中の方が価格が低い筈です。亡くなれば高くなるのが自然でしょうが、逆の現象が起きることがある様です。つまり作品の評価が作品そのものに無く、存命中の画家の地位や肩書つまり権威にあったための現象の様です。亡くなれば地位や肩書は無に帰して権威は無くなるのですから、死後の価格はより一層作品そのものの価格に見做せる訳です。

音楽の世界では、「音楽の父」と言われるＪ・Ｓ・バッハの生前は余り有名ではありませんでした。十八世紀前半では、今では「音楽の母」と言われているヘンデルの方が遙かに有名でしたし大家でした。バッハは、ヘンデルに会いたいと思って訪ねに行ったり招待したりしましたが、結局は会う機会に恵まれませんでした。ヘンデルの方が、当時は殆ど無名であったバッハに関心が無かった様です。バッハが現在の様に有名になったのは、死後七九年経った一八二九年に、メンデルスゾーンがベルリンで「マタイ受難曲」を演奏してからのことだったと言われています。それまでは世界中の殆どの人が、バッハの音楽を聴く機会がありませんでした。生前のバッハは、例えばライプツィヒの小さな教会である聖トーマス教会などのためにカンタータを作曲し上演しましたが、決して楽な生活ではなく、初期の頃は殆ど毎週の様にカンタータを作曲しました。毎日曜日の礼拝のために数年間で作曲したのは二五〇曲に及びますが、まさに驚異的です（そのうち約五〇曲は紛失しています）。

生前の評価が必ずしも正当でない事例は、まだまだ沢山あると思いますが、それらは歴史になることによって正当な評価を受ける様になります。しかし、監獄にいる無実の人の場合は、歴史に身を委ねても殆どが無駄に終わるのではないでしょうか。アランは次の様に書いています。「もしも友だちがいない人間が監獄に一度這入れば、長い間そこにいる危険があります。過去の歴史的事実は覆ります。最早、誰もそれを当てに出来ません。無実の人には手段しかありません。もしも無実であり得るのでしたら、偏見には偏見を、そして不正に対しては不正で行動させるのです」と書いてこのプロポは終わっています。

歴史家たちは、客観的事実に基づいているのが歴史である、と言います。しかし、そんなものが本当にあるのでしょうか。書かれているものが必ずしも事実でない場合もありますから、歴史が覆ることは幾らでもあるに違いありません。歴史とは、現代の人々が最も本当らしいと推察した虚構の物語に過ぎないと言っても過言ではないのかも知れません。新しい物語の発見により、次から次に歴史は書き換えられて行くからです。

しかし、司法調査は書き換えられるものであってはなりません。そんなことは決して許されてはならないことです。何故なら事実は一つであるからです。司法調査の目的は只管一つの事実を明らかにすることにあります。従って、〈偏見には偏見を、そして不正に対しては不正で行動させる〉こともあり得るとアランは言っています。如何なる手段であっても、一つだけの真実が明らかになることが第一義ですから、仮に結論までの証明が無くても構わないことになります。従って、不正に取得した証拠物件は証拠として採用されないのが司法の常識ですが、冤罪の場合は〈不正に対しては不正で〉行動することが可能であっても良い筈です。例えば、真犯人しか知らないことを、不正に盗聴しても良い筈です。あるいは〈偏見には偏見で〉行動することが可能であっても良い筈です。例えば、今ではすっかり忘れられた二〇一六年七月に行われた東京都知事選挙で、鳥越俊太郎氏は女性問題を週刊誌に書かれたために裁判所へ提訴しましたが、手段が違う様に思われます。その様な時間がかかる正当な手段では、有権者には真実が分からない儘、投票日がやって来て落選して仕舞いました。鳥越氏は、事実無根であれば、その週刊誌が過去に掲載した間違った記事を調査して、どれ程いい加減な週刊誌であるのかを速やかに公表するのも一つの方法ではないかと思われます。まさに〈偏見には偏見〉で対抗すべきでした。（完）

百十六　速 度

東海道五十三次を通って江戸から京都まで行っていた時代では、とても考えられない位に現代の交通機関の発達には目を見張るものがあります。確かに、二週間もかかって行った所へ、現代では三時間もかからず行けるのですから、非常に便利であり、とても意義のあることの様に思います。

しかし、三時間かかる所へ二時間四十五分で行けるようになっても、非常に意義のあることでしょうか。十五分早く到着することが、乗客たちの利益になり、ひいては社会の利益になるのでしょうか。一九〇八年七月二日のプロポで、アランはパリとセーヌ川の河口にある町であるル・アーブルを結ぶ鉄道が十五分早くなったことについての感想を、次の様に述べています。

「（新型の蒸気機関車を）何故作ったのでしょうか。多分、パリとル・アーブル間の旅行時間を十五分短くするためです。大変に高いお金を払って購入したこの十五分で、幸福な旅行者たちは何をするのでしょうか。多くの人は時間が来るまで駅のホームで過ごします。他の人は、もう少しコーヒーを飲んで十五分を過ごすでしょうし、出発のアナウンスがあるまで新聞を読むかも知れません。利益は何処にあるのでしょうか。利益は誰のためなのでしょうか。

奇妙なことは、もしその列車が速くなく、十五分前に出発するとか十五分遅く到着するとかして少なくとも速い列車よりも十五分多くかかっていることになっても、旅行者は退屈して過ごすことになります。誰でも、このプロポを苦労して書くのに似て、あるいはトランプで遊んだり、ぼけっとしていたりして、一日に少なくとも十五分は無駄に過ごすことがあります。何故、その時間を客車の中でも使ってはいけないのでしょうか」。

客車の中の座席は快適で、どんな安楽椅子よりも快適です。従って十五分早く到着すると、十五分間座席にいることが出来なくなります。あるいは又、出発までの時間が十五分遅くなっても、その間にコーヒーを飲んだりぼけっとしている時間が増えるだけではないでしょうか、と言ってアランは蒸気機関車の速度が速くなったことの成果を余り高く評価していません。

現代のサラリーマンの場合でも、東京から大阪への出張は日帰りになる様で、一泊も出来ない会社が多くなって来た様です。新幹線の「のぞみ」で行けば十分に一日で往復出来るのですから、経費を削減する上では当然なのかも知れません。しかし、それでは大阪の町や美味しい食べ物を知る機会が少なくなりますから、東京と大阪の交流という観点から見ると余り成果は上がらなくなるだろうと思います。何処へ行くにも推して知るべしです。地方の過疎化問題の原因も、実はこの辺りにあるのかも知れません。つまり地方に用件があっても、交通機関の発達のお陰で用件だけを済ませて短時間で往復出来るのですから、地方に滞在する時間が短くなり、ひいては住民も減少し、人も物も金も減少して空洞化するばかりではないでしょうか。それでは逆に、便利に発達し続ける東京に住む人々は幸福なのでしょうか。

「人生は特に良いものです。人生そのものによって良いものです。理屈は何もありません。旅行やお金持ちや成功や楽しみがあるから幸せなのではありません。幸せであるから幸せなのです。幸福は人生の味わいそのものです。苺には苺の味がある様に、人生には幸福の味があります」とアランは一九〇九年五月二九日のプロポに書きましたが、ここにアランの幸福論の真髄があります。勿論、それは無為であることではありません。何もしないことが幸福ではありません。もっと適切に言うなら、何をしても幸福でいられるのです。つまり行きたい所へ旅行して行ける

とか、お金を沢山持っているとか、成功して出世したとか、好きなことをして楽しめることが幸福ではないのです。行きたい所へ行けなくても、お金は余り無いけど、成功しないで出世もしなかったけれども、好きなことをして楽しむことも無いけれども、幸福でいることは可能なのです。苺が苺であるためには土と水と太陽さえあれば、止揚された崇高な思想が何も無くても、素晴らしい苺の味は生まれるのです。何故なら、そこには命そのものがあるからです。

　新型の蒸気機関車は決して命そのものではありません。旅行もお金持ちも成功も楽しみも命そのものでは無いのです。従って少しでも命に触れて幸せであるためには、旅行の時には旅行の命に触れることです。アランの美しい言葉が前者のプロポにあります。

「大きな車窓には河や谷や丘や村や町が過ぎて行くのが見えます。小丘の斜面を線路が続き、その線路の上を列車が行き、河を進む舟の様に見えます。その地方の豊かさの全てが広がっています。或る時は小麦やライ麦であり、或る時は甜菜畑や精製所です。その次には美しい樹林であり、その次は牧草と牛と馬です。何本もの溝が大地に横たわっている様に見えます。そこにあるのは地理学にとっての最高のアルバムであり、あなたは難なく頁を捲って、毎日変わって行くものが見えます、四季によっても変わって行き、刻一刻と変わって行きます。丘々の向こうには雷雨がわき上がって行くのが見え、干し草を積んだ馬車は道を急いで行きます。又、別の日には人々が金粉の中で刈入れ作業をして働き、大気は太陽にふるえています。この様な光景と比肩するものは何でしょうか」。

　質素で出世もしないで楽しみが何も無い生活にも、必ず幸福はあるのです。何故なら、命そのものには本来幸福の味があるからです。充足した味が必ず付随しているからです。それは誰にも、何処にいても、存在しているものです。そして、幸福とは真に味わうことが出来る人のものでもあるのです。（完）

百十七　哀れなもの（小魚）

夏の風景です。川は蛇行し、柳が何本かあります。釣り人が素早く釣り糸を上げます。魚がぴちぴちと太陽に光っています。陽気で穏やかな風景に見えますが、人間嫌いの人がその風景を邪魔して釣り人に「あなたの喜びは、何も見ない盲人になりたいのです。太陽にぴちぴち光っている銀貨のような魚にあなたは感動していますが、それは死にかけている不幸な生き物です」と言います。一九〇八年七月十一日のプロポの最初です。釣り上げた魚のことを言っているのです。

それに対して釣り人は「神経質な奴だ、とっとと消えてくれ。もしあなたが言っていることを真に受けたら、生きては行けない。骨付きあばら肉を切っている間、私は柔らかい羊のことを泣かなければならないのだろうか。もし私が哀れな馬が既に力の限界に来ていて、馬小屋から出て来る時には空腹で半分死んだ様になっていたと考えるなら、どうして辻馬車に乗ることが出来るだろうか。詩人のこの同情を何処で止めれば良いのだろうか。私たちが動けば、小さな昆虫を殺すことになる。親切が過ぎれば、結局は意地悪になる。もし全てに期待すれば、心が擦り切れて仕舞うと私は言いたい。同胞を愛することだ。そうでない者の苦痛は決して考えないのが正しいことだ」と答えます。

日本人が食べる時の挨拶に「いただきます」「ごちそうさま」がありますが、これらは他者の命を頂戴して食べることを感謝する意味があるとのことです。人間嫌いの人は、この日本人の挨拶に込められた思想を極端なまでに拡大解釈した時の言葉だろうと思います。仏教思想の様に命あるものを殺生してはならない思想を徹底したならば、恐らく自らの生命の維持も困難になるかも知れません。勿論、生命を尊重することは大切なことです。ところが、全ての生命を等しく尊重するなら〈心が擦り切れて仕舞う〉と釣り人は言います。全ての生命ではなく、同胞に限定して、〈そうでない者の苦痛は決して考えないのが正しいことだ〉と言います。

それから又、全ての生命は抽象された生命の様に等しく尊重されるものではない、と沢山の襞がある肩掛けを肩から掛け直して、優美な若い女性が言います。

「私たちの喜びは極めて少なく、沢山の苦しみを前提としています。この肩掛けも哀れな女性の手で刺繍されたものです。刺繍をするには眼を大変酷使します。工場や仕事場や屋根裏部屋での暗い光景が私には見えます。しかし、あなたが話していることは何であろうと全て根拠が無くて、大変に抽象的です。草の上に飛び出た小魚にとっては大変に全てが寒々しています。脚を強く踏まれて痛そうに鳴く犬は、あなたの話よりも私の心を何時も動かしました。自分の心に鎧を着けなければなりません、馬の様な動物に涙を流さない様にとあなたは良く言います。しかしあなたは、私が見たことも会ったこともない見知らぬ男や女の労働者について私が泣くことを望んでいるのです。私の眼が黒いうちは、私は痛みが酷くなる様に苦痛を生んでいく様な酷い哲学者ではありません。あなたの本質には、私の心を開いたり閉じたりする美徳が決してありません。あなたが言う様に、時として眼を閉じなければ、人は生きて行けません。まあ、如何に私が眼を開けて無駄であっても、私は肩掛けや刺繍を見ます。でも、その仕事ぶりや針は決して見えません。私には職工や刺繍機械が決して見えません。私が自分で示している苦痛を無視した後で、何故あなたは私が隠している苦痛を見付けに行きたいのですか」。

生命が抽象されれば、愛も感情も抽象されてそれらの実体は排除されますし、内実のない言葉だけで人は理解し様とします。「合理的な愛の中には理解すべきものは何もありません。愛と理

性は混合されると腐敗します」と『思想と年齢』（第三部七章）の中でアランは言っていますが、〈全ての生命を等しく尊重する〉こととは、生命を抽象することであり、生命の実体を忘却することです。本当の公平な気持ちを持っているなら、毎日生活している家族の生命と、地球の裏側の人々の生命とは異質にならざるを得ませんし、それが生命を抽象しない人間としての本当に公平な気持ちでもあります。

「生活することとは、人間ではなく、馬車に繋がれた馬の通る道が立派になる様にすることです。全ては、哀れを癒やす私たちに代わって組織化されます。あなたは説教をしても危険を負うものは何もありません。あなたの博愛は、太陽に当たる魚のようにぴちぴちして虚しいものですわ」とこの女性が言う言葉でプロポは終わります。この思想は人間嫌いの人には分からないものです。何故なら人間嫌いの人には他者を頼り、信じ、協力する意志が稀薄であるからです。つまり彼には、社会という組織化された思想によって行使される精神が弱体化しているために、生命を公平に理解出来なくなっているからです。〈太陽に当たる魚のようにぴちぴちして虚しいもの〉になっているからです。

しかしながら組織化され社会化された思想にも、愛と感情は必須です。つまり愛と感情を理性で理解しないことです。生命を抽象化しないことです。障害者施設を襲って十九人を殺した犯罪、ＩＳ（イスラム国）のテロ、日本赤軍のテロ、そしてナチスのホロコーストや米国の原爆投下など、全ての殺人や虐殺は生命を抽象化した精神が齎した行為の結果であったと言っても過言ではないと思います。感情の文学である〈詩〉が、文学や芸術の範疇に止まりながらもその役割は益々大きくならなければなりません。愛と感情によって組織化され社会化される所以もここにある筈です。（完）

百十八　文学の召使い

小説を書いて筆一本で生きて行くことを決心した若者へ、アランは一九〇八年七月十五日のプロポで忠告しています。アランが小説家のお手本として言っているのはスタンダールです。従って、スタンダールの生涯は若者にとって良い参考になると思います。

スタンダールは、一七八三年一月二三日にフランスのグルノーブルに生まれました。父親は弁護士で、裕福な家庭に育ちました。母親は彼が七歳の時に亡くなりますが、生涯に亘って慕い続けました。その反対に、王党派であった父親への反感は強く、長く続いた様です。エリートたちが入学するグラン・ゼコールの理工科学校に合格しましたが、パリの生活に慣れず、その後陸軍少尉となってイタリアへ遠征しました。母方の祖先がイタリアであったこともあり、彼はイタリアが大変気に入る様になります。しかし、十九歳の時に軍を辞めて輸入問屋に勤務しましたが、二十三歳の時に再び陸軍に入って経理畑を歩み、官僚としてそれなりに出世もしました。ところが一八一五年にナポレオンが没落すると、彼も没落しフリーのジャーナリストになります。『ナポレオン伝』（一八一八）や『恋愛論』（一八二二）などを書き、代表作『赤と黒』の発表は三十九歳の時（一八三〇）です。同年の七月革命後には政治の世界に呼び戻されて、ローマ教皇領チヴィタヴェッキア駐在フランス領事に任命されます。イタリアで外交官をやりながら、休暇中のパリで『パルムの僧院』（一八三九）を書きました。そして五十九歳の時（一八四二）に、休暇のため帰国したパリの街頭で脳溢血のために倒れて亡くなりました。今はパリのモンマルトル墓地に眠っています。

以上の様に、スタンダールは生涯を専ら小説家として過ごした訳ではありません。機会あるごとに職務に就いていました。彼の代表作も、売るための作品ではありませんでした。小説を売ること、小説家として著名になり名誉を得ること、これらの行為には必ず高名な者の作品を分析し参照する模倣の精神が作用して来ます。「あなた（若者）は読んだり調べたりします、あなたは金糸を取り出す布ほぐしの専門家です。あなたから素晴らしいものを私は期待します。それでどうするのでしょうか。あなたは何時も文学の召使いでしかないでしょう」と言ってアランは若者に個性の重要性を説きます。売るために書く者は、〈文学の召使い〉に成って仕舞います。文学とは自分のために書くことです。読者のために書くのではないのです。作品を売るために書くのではありません。「あなたのために考え、あなたのために書きなさい」とアランは言います。王様になれとは言いませんが、「郡長の様になりなさい。そして、ゆっくりと心ゆくまで書きなさい」と言います。それが文学で幸福になる道です。まさにここには若者にとっての適切な忠告があります。

若者に書く才能があっても、そのことが筆一本で生きる小説家の幸福へ直結する訳ではありません。色々な高名な作家の作品を模倣すれば、それなりに売れる可能性はあります。しかしながら幸福にはなれません。充実感が無いのです。勿論、達成感もありません。何故なら売るために努力しているのですから、自分自身を全て表現出来ないからです。真の個性が表現されないからです。個性（individualité）とは、分割できない（indivisible）個人（individu）の全てを指すものです。売るためという個人の一部を特化したり抽出したりして書けば、当然に個性は歪曲し、やがて喪失します。個性ある表現とは、まさにこの不可分の個人全体を押し出して、出て来たものを表す行為でなければなりません。「栄光に向かう道は、これ以外は決してありません」とアラ

ンは言います。しかし、「栄光がその人間を決して豊かにしないことはあり得ます」とも言います。売れない作品にも栄光はあり得るのです。お金持ちに成れなくても栄光はあり得るのです。アランは次の様に書いて、このプロポを結んでいます。

「スタンダールは『赤と黒』と『パルムの僧院』の二つの小説を書きました。前者は、今まで書かれて来た二冊ないし三冊の最高傑作の一冊であり、後者は最も美しい作品ですが多分第二級のものです。しかし、誰がこれらの小説を読んでいたのでしょうか。誰が読むのでしょうか。スタンダールは一銭も貰っていませんでした。しかしながら、スタンダールという栄光を自分のために望むことは大変な野心になると私は考えます。ところで、あなたの狙いがそこにあるとするなら、二つの目的を忘れさせることになり得ます。一つは人気であり、もう一つは素質です。もしもあなたが若さゆえの特有の魅力を持っているとするなら、愚かになるためだったらそれを使いなさい。本を創るためなら使わないことです」。

栄光には〈人気〉も〈素質〉も必要ありません。作品を書くためにはそれらを使わないことをアランは勧めます。スタンダールの『赤と黒』が発表された当時は、少しも評判になりませんでした。スタンダールは自らの個性について書いたのであり、決して売るためではありませんでした。況んや賞を貰うためでも、アカデミーに推薦されるためでもありませんでした。虚栄と皮肉に満ちたフランス人精神を批判し、イタリア人の個性を愛したスタンダールは墓碑銘として「ミラノ人アッリゴ・ベイレ 書いた　愛した　生きた」を生前から書き残しておりました。自らをミラノ人と称し、本名のマリ＝アンリ・ベイルをイタリア語で呼んでいました。ここからは、文学を人生の虚栄のために利用しなかったスタンダールの本領が感受出来ます。文学の召使いにならなかった姿が見えて来ます。

その後、パリには「文学青年非奨励同盟」という組合がありました。これは才能の無い若者たちが、生活することの困難な文学に手を染めないうちに、他の職業へ就く様に勧めるものでした。ところが才能が無いことを証明することが殆ど不可能でしたから、この組合は自然消滅した様です。成る程、若い時の才能が認められることは殆どありません。天才が稀有な所以です。しかし重要なことは、才能があっても無くても書くことです。デカルトは不決断が最大の悪である、と言いました。栄光は結果では無く、決断して書くことにあるのです。そして真の栄光は、召使いにならずに書ける環境を手に入れることにあるのかも知れません。（完）

百十九　謙遜と思い上がり

議論する者たちに心から感嘆することは意外と少ないものです。何故なら議論することとは、必ずしも真実を言う必要が無く、相手の矛盾を突くだけで十分であったり真実への必然性が稀薄であったりするからです。議論する相手よりも自らの意見が優位であれば殆どの目的が達成されるからです。従って、〈モラリストたちが感嘆した人間を順番に思い描くこと〉は間違った見方の様でもあるとアランは言います。感嘆することは、人間にとっては容易に行われます。例えば身近な人が書いたものや話したことは、思った以上に沢山感嘆する、とアランは言います。知り合いがテレビ出演すれば、彼の顔を画面で見るだけで感嘆するでしょう。話している内容は二の次です。同様に、長年付き合いが無かった学友と会えば、それだけで感嘆するでしょう。彼が如何なる思想の持ち主であるか分からなくても、感嘆する上では構わないのです。

「私（アラン）が知り合いになった学者とか文学者とか演劇家とか哲学者の彼らは、私には寧ろ不安そうに見えましたし、自分自身に対して疑い深く、人が言うことを聞いてばかりいる聞き上手であり、思想の蒐集家であり、自分の話に慎重である様に見え、艶っぽい老女たちのどぎつい光を恐れる様に自由な議論を避けている様に見えました。誰もが光を背に向けて話をしますし、顔に白粉を塗る様に扇形に言葉を広げて行きます」とアランは一九〇八年七月二一日のプロポに書いて、客観的で冷静な評価を求めないで、世間に迎合して良い評判ばかりを気にしている人間の軽薄さを表しています。従って彼らは「他人の作品が余りにがっしりとしていると信じている理由から、他人の作品を解体します。そして、何故わんわん吠える子犬の様に、議論に興奮するのでしょうか。全く簡単です、叩かれるのが彼らはとても恐いのです。…（略）…彼らは世評や勲章に沢山の価値を与えます」。

つまり在りの儘の真実よりも、世評や勲章が重要なのです。栄光の〈光を背にして話〉をしようとしますし、現在の自らの顔に〈白粉を塗る様に〉美辞麗句を並び立てた言葉で自己を正当化し美化して行きます。その挙げ句の果てに、実力とは関係のない虚飾の上に構築された忖度を他人に求め様とする思い上がりに行き着きます。その時に、地位や名誉は都合良く働きますから、益々虚栄心が強くなって行きます。向上心とは似ても似つかない精神ですから、自然と自己防御の姿勢をとり、色々な思想の言葉を持ち出して来て〈わんわん吠える子犬の様に、議論に興奮する〉人間になります。真に優れた学者とか文学者とか演劇家とか哲学者であったならば、その様な所謂〈忖度〉を警戒するのではないでしょうか。

詩人においても同じです。「もしも一人の詩人が好きになりたいのなら、何でもない詩句を称賛しなければならなくなると私（アラン）は気付きました。そして、それらの詩句は語順転倒や韻律を整えるための意味のない言葉で創られていることをあなたは知ることになるでしょう。そして詩人は喜びます、何故なら詩人は「それ故に、自分が分からない」と独り言を言うからです。雄弁家や俳優たちも、そうした人間です。彼らは上品に頭を上げて行きます。しかし、その内側には拍手喝采の祝砲やアンコールを計算しています」とアランは言って、大衆に迎合して雄弁家や俳優に成った似非詩人の素顔を指摘します。フランス象徴派の詩人たちは、真に詩を理解する者は世界に五十人いれば良い、という様なことを言いましたが、〈拍手喝采の祝砲やアンコールを計算〉しないで、精神的に荒廃した時代を自ら先行して批判して行く詩人であれば納得のいく言葉であろうと思います。炭鉱に発生する毒ガスを真っ先に感知して斃れるカナリヤの様な役

割を詩人が担うとすれば、〈世評や勲章〉は必要ありません。却って感度が悪くなり、詩人が詩人でなくなるのではないでしょうか。

真に優れた芸術家は自らの感性を常に磨いて置く人間であり、決して思い上がったりしません。又、稚拙な欲求を制御出来ずに自らの感情を子供っぽく振舞うこともありません。自らの精神と意見を保持し続けます。もしも「有益な意見のための門戸を全て解放」するなら、「それは彼の意見を置き去りに」させることであるとアランは言います。そして褒められて思い上がってはならないことを繰返し言います。感度を上げるためには謙虚になり謙遜することが重要です。何故ならそれがカナリアの様に、真に優れた芸術家の生きる精神の姿勢であるからです。

「自分が行うことを時々満足する様な人間は重要でしょうか。次の様に独り言を言う人間も重要でしょうか。「私はこれを知っている。私はあれを理解している。そこにあるのは良く書かれた頁だ」。私は彼が孤立して存在しているかどうか知りません。しかし、もし私が彼と知り合いでなかったならば、決して称賛しようとはしないでしょう。私の意見は直ぐに彼を軽視するのがはっきり分かるでしょうし、もし私の讃辞が彼に何らかの効果を与えたとしても、それは彼が満足しなかった文章とか巧みに説明した観念を私が褒めたからであって、それを十分に理解することはありません。そして彼が私の讃辞を受けるのは、脚を泥だらけにした愚鈍な犬にぺろぺろ舐められて愛撫されているのに殆ど似ています。そこにあるのは本物の思い上がりであり、あなたは殆どそれに気付いていないのです」と書いて、このプロポを結んでいます。彼には〈満足しなかった文章とか巧みに説明した観念〉は眼中に無いのです。褒められることが第一義だったのです。従って、そのためには称賛してくれる知り合いの意見を求めてばかりいます。作品そのものの評価には頓着しないのです。

その挙句に仲間うちの評価のみで満足する様になって行き、恰も客観性を担保するかの如くに肩書や賞の価値ばかりを高めて行きます。公募しても、,賞を貰うのは断然知り合いが多くなります。〈愚鈍な犬にぺろぺろ舐められて愛撫されている〉のですが、それでも肩書や賞が作品の価値を高めて行きます。その様な状況が毎年続いて行きますから、芸術家の精神も蝕まれて行き、受賞した作品の作者が必ずしも優れた精神の人ではなくなって仕舞います。謙遜の無い思い上がった人間になって仕舞います。そして、現代の世界と自分を正しく見ることが出来なくなりますから、優れた人間性にとっての精神の糧も毒も見分けられなくなる危機的状況が生まれます。カナリアの役割と機能を放棄する様になって行くのです。（完）

百二十　恐怖と夜

社会機構や都市が生まれるのは、食べたり服を着たりする必要性からではなく、従って〈経済〉によって生まれるのではない、と或る社会学者は思考します。何故なら未開人たちは手を伸ばせば食糧を摘んで手に入れることが出来るし、殆ど服を着る必要も無いからです。ところで、どんな都市にも王や司祭や学校や法律や警官がいるが、人間は自然と市民になるのであり、役所を愛するのは市民自身のためである、と一九〇八年七月二二日のプロポの中で或る社会学者は言っています。これに対してアランは彼に言いました。

「私（アラン）は別の結論を下すのですが、〈経済〉は必要性の第一歩ではないということです。睡眠は空腹よりも大変に我慢出来ないものです。人間は空腹になっても我慢出来ます。しかし、何人も眠らないではいられません。…（中略）…一方で見張りをして、他方では眠っていました。その様なことは都市として最初に考えられるデザインでした。都市は経済的に考える前に、軍事的なものでした。あなたが話しているこれらの自然発生的条件は、隣国人や野獣や蛇に対して防御すべきものでした。〈社会〉は恐怖から生まれた娘であると私は思いますし、空腹ではありません。もっと正確に言うなら、空腹による最初の結果は、人々を集結させることよりも寧ろ四散させたに違いありませんし、全ての人々は食糧を探しに色々な所へ行くでしょうし、探検する人は少ないでしょう。少なくとも、欲望は人々を四散させますし、それに対して恐怖は人々を集結させます」。

この様にアランは書いて、都市や社会の始まりが人間の〈恐怖〉であることを考察しています。しかも恐怖は眼に見えないものからもやって来ます。取分け、見えないものへの恐怖が最も怖いのです。

第一次大戦に参戦したアランは、静かになって何もすることがなくなった夜が最も怖いことを『大戦の思い出』の中で告白しています。砲弾を避けて逃げ回ることよりも怖いと言います。つまり行動している時には恐怖は稀薄になって行きます。相手が見えれば、相手の味方になるか、敵対して対峙するかです。そこには明確な対象が存在しています。ところが、眼に見えないものに対しては想像力ばかりが働きますから、物質的力だけでは叶わなくなり、恐怖が増大します。しかし眠れば怖くなくなりますが、物質的力の餌食に成って仕舞う怖れが生じます。都市は「睡眠と目覚めを計画的に上手く組織立て」るものであるとアランは考えます。〈一方で見張りをして、他方では眠っていました。その様なことは都市として最初に考えられるデザインでした。都市は経済的に考える前に、軍事的なものでした〉と思考したアランは、都市と軍隊の相関関係を指摘しています。

そもそもヨーロッパにおいての都市とは、外敵から自らを守るためのものでした。従って人々が集まる所に軍隊は必然的な社会の組織であり、「〈軍事〉関係が人々を支えていることを忘れないで下さい」とアランは言います。

それに対して社会学者は「必要性を整理して順番を付けます。守るべき必要性か、平和の裡に眠るものであるかです。次に、食べる必要性と結局は所有するものであるかですが、空腹を感じる前に想像力を働かせて食べる必要性しかないのは誰でしょうか」と質問します。

アランは答えます、「恐怖が閉じ込めているあらゆる美徳を恐怖から得ているのかどうか、私には分かりません。睡眠は、不寝番や軍隊の生みの父親です。夢想の父親でもあります。そこか

ら別の恐怖である死や幽霊の恐怖によって宗教が産み出されます。兵隊は野獣を追い払い、司祭は幽霊を追い払いました。兵舎は寺院であり、その様なものが都市の初めの中心でした。機械や工場が活動するのはずっと後のことです」。

物理的力である野獣を追い払うのは兵隊（軍隊）であり、眼には見えない幽霊を追い払うのは司祭（宗教）である筈です。宗教は眼に見えない恐怖を追い払ってくれるものである筈です。戦争の恐怖は物質的力による野獣への恐怖ですから、眼に見えるものです。しかしながら、静かな夜に襲って来る、眼に見えない恐怖が最も怖いとアランは言います。それらの眼に見えない恐怖を追い払うために寺院があり、寺院は〈都市の初めの中心〉であったのです。都市に城壁を設けるのは、あくまで物質的力に対抗するためであり、寺院は眼に見えない恐怖を克服して心の安らぎを誰もが所有するためのものです。従って寺院は逃避出来ないものであり、又全ての人々を受入れるものでもあります。寺院には原則として祈るために誰もが這入れなければなりません。都市の城壁は這入れなくするためのものですが、寺院は誰もが這入れるためにあるものです。それが寺院の本来の姿ですが、近年の宗教団体の中には警備を厳重にして身内の信者たちしか這入れないものが現実にかなり存在しています。しかもその様な施設の中には〈文化会館〉と称して、数階もある大きくて瀟洒な建物を月に数回使用するだけで、しかも年間を通して全館使用することが殆どないものが存在します。信者たちからの寄付金によって建設されている様ですが、用途が全く不可解です。信者たちの私有財産を巻き上げるための施設建設に過ぎないと考えざるを得ません。信者たちの物理的力を取り上げるその様な宗教は、まさに眼に見えない恐怖よりも眼に見える〈隣国人や野獣や蛇〉ばかりを相手にしているのです。宗教が軍隊化しているのです。その様な施設は、それこそ保育園などに用途変更して、宗教法人として享受している非課税の恩恵を広く地域へ還元すべきであると考えます。

最後に、アランは生殖の問題に触れていますが、それを経済の横に置いて、反社会的な必要性として整理します。何故なら生殖も経済も「人間が人間に武装するからです。しかし、睡眠はそれよりももっと力がある王です。太陽は称賛されますが、夜は怖がります。日が落ちると、何故羊飼いの喇叭や羊の群の鐘が私たちの心に大変活発に鳴り響くのか、以上でお分かりのことと思います。おゝ夜よ、あなたは都会の女王です」と書いてこのプロポを結んでいます。〈羊飼いの喇叭〉も〈羊の群の鐘〉も、それらの存在を示してくれるものであり、聴覚を通して眼に見えるものに変換してくれます。ところが夜そのものは全てを見えなくして仕舞い恐怖を生みます。人々が城壁や寺院を造る所以になります。都市を形成する所以になるのです。（完）

百二十一　人生はメカニズムである

哲学者と化学者の対話から、アランは一九〇八年七月二四日のプロポで、人生について興味深い説明を示唆しています。所謂「人生とは何か」という古くて新しい問題です。先ず哲学者は人生をメカニズムに従って説明することが不可能であると言います。

「メカニズムの歯車は大変に小さなものでしかない、と私（哲学者）は理解している。しかし、あなた（化学者）が人生を一つのメカニズムに帰着させる時、その時はあなたを引き止める。人生とは何か、如何にして生まれて、生き続けているのか、私たちには分からない。それは謎であり、決して計算には適しない何か未知の力であり、私たちの予想を裏切るものである。狂人とか激怒した人の力を如何に思うのだろうか。如何なる限界まで勇気は人間の肉体的力を高めることが出来るであろうか。病気とか疲弊した体にとって、精神的な意志は如何なる影響を与える帝国になるのだろうか。誰もそれを言うことが出来ない。そして、ここで事実によって打ち消される無謀な仮説を何故立てるのだろうか。」

哲学者は、自ら科学者になることを否定しています。科学が最も抽象された学問である数学として人生を把握したとしても、やはり〈決して計算には適しない何か未知の力〉があって、数学的な仮説では成立しないものが人生であろうと思われます。譬え結果が当初の予測と合致したとしても、計算から導き出したものでないことは明白であり、その様な事例は枚挙に遑ありません。人々はそれを簡単に「第六感」と言いますが、まさに理性や計算からの結果ではありません。その分かり易い典型は賭事です。この哲学者は、賭事は人生である、と言うのかも知れません。

ところで化学者も「人生というものが分からない」ものであることを認めます。例えば「砂糖水の入ったコップの中で起こること」は私たちには分かりません。酸素と水素がどの様に混じるのか私たちには分かりません。電気や熱や光が何であるのかも私たちには分かりません。私たちが量る重さも地球上の重力に対する数値であり、「普遍的重さとは、手際の良い便利な仮定でしかありません」。そして生命力が何であるのか、全く知らないのが本当であっても、それでもその効果や状態を判断して測れないと言うのは真実ではない、と化学者は言います。人間が長い間食べることなくして大仕事をやることは決してなく、「沢山の熱とか、もし望むなら脂肪や砂糖の様にエネルギーを含んで閉じ込めている肉体」は、決して別のものとして人間の力を保っているのではなく、そのエネルギーは計算出来るものです。従って人間は機械にもなり得るのであり、更に化学者は次の様に言います。

「色々な食料に含まれているエネルギーがどの位あるのか正確に量るのは簡単です。その上で限りなく労働が行われて来たのであり、誰も無知の儘でいることは出来ません。何故なら新聞がそれを書くからです。人間が産んだ熱や、労働の上で産むことが出来た経験の全てが確認されて益々良くなって行くことは、所謂生命力は供給されるエネルギーを食料に変えることであって、言い足すことは何もありません。生きている人は機械であると私が言うなら、それ以上の意味は何もありません。無謀な仮説を立てているのはあなたであり、私ではありません。」と化学者が言ったことを書いて、その儘このプロポは終わっています。

人生は、確かにその全てをメカニズムに帰着することは出来ません。しかし、メカニズムとして捉える側面があることも、アランは化学者の言葉を借りて示唆します。人生に可能な限りのメカニズムを導入することは理性と知性の働きであり、性急な結論へ人間を追いやるのを防御する

安全弁にもなる得る筈です。つまり何事にも性急に白黒を付ける性行、敵と味方に分断する性癖を防御するための安全弁になり得る筈です。それらの安全弁の効果のうち、最も重要と思われるものは戦争へ人間を追いやらないことであると考えます。戦争を、賭事やスポーツの様な勝負事と見做さないことです。戦争は、取分け敗戦が濃厚な戦争は、まるで賭事をやる時の様に一か八かの性急な結論を下した者によって齎されます。この様に先制攻撃をした者が敗者になる事例は過去の歴史を繙けば数多くありますが、戦争を導かなかった理性や知性が機能した事例も今後はもっと研究して行く必要が歴史学者たちに求められているのではないかと考えます。いずれにしても、人生のメカニズムは平和へ続くものと思われます。何故なら、その行為には終わりが無いからです。戦争がない歴史はないと言います。しかしながら、休戦と称して戦闘を終結したものも戦争の終わりと見做すなら、終わりのない戦争も歴史にはありません。何故なら、戦争は終わらなければならないからです。その反対に、平和は終わってはならないからです。ここにメカニズムの思想があると思います。ここに人生を正しく見ようとする人間の理性と知性と真の正義が、正当に化学反応して行くのだろうと考えます。

　数々の戦争によって多くの人生が謂れのない犠牲を払って来ました。メカニズムで捉え切れない結果としての思想が、ある時は哲学と称して又ある時は宗教と称して性急な結論を求める人たちのために、「事実によって打ち消される無謀な仮説」に眼を向けずに来ました。〈仮説〉によって人生のメカニズムを構築する意志と努力を放擲して来ました。その結果、真実を追究する思考と創意工夫が稀薄になって、権力者に阿る理想主義者と神秘主義者ばかりが大手を振って、私物化されているかの如き社会が形成されて行く様です。人間が思考することとは、勝敗を求めることではありません。結果のみを判断することでもありません。それはメカニズムを生きることなのです。（完）

百二十二　彫像には音楽家がいる！

ベートーヴェンの胸像が建てられますが、それは決してベートーヴェンの音楽を表したものではありません。ベートーヴェンだけではありません。画家や小説家や劇作家や詩人の彫像も良く建てられますが、彼らの作品の真のイマージュは作品の中だけにあるのです。ベートーヴェンの音楽を理解して貰い、愛されて皆から崇拝して貰うためには、彫像を見せても駄目です。彼の音楽を聴いて貰うしかありません、とアランは一九〇八年八月二日のプロポに書いています。
「そして、この上なく完璧な才能とはベートーヴェン自身のことですが、大理石で音楽を創る訳にはいきません。言葉でも駄目です。それ故に、もしベートーヴェンが有名になって愛されて皆から崇拝されて欲しいとあなたが思うなら、胸像を見せる必要はありません。彼の音楽を聴かせなければなりません」。

当たり前のことではないかと思うかも知れませんが、実を言うとなかなか当たり前ではないのです。芸術作品は、その作品そのものの評価が極めて困難なのです。時間を掛けて創作した作品が、短時間で創作した作品よりも必ずしも優れている訳ではありません。例えばブラームスの交響曲第一番は完成するまでに十年程掛かっていますが、交響曲第二番は僅か数ヶ月で完成したと言われています。ところが重厚な旋律に満ちた第一番よりも、まさにブラームスの〈田園交響曲〉であると言われている軽快で清澄な第二番の方が好きだと言う人も沢山いると思います。但し、作品の創作に掛けた時間については知識として知らない人が多いことを前提にします。ところが十年掛けて創作した作品と、僅か数ヶ月で完成させた作品を知識として了知してから両作品を比較した時、途端に評価が違って来ることも事実としてある様です。第一番の方が良いと言う人が多くなって来るのだろうと思います。実際に第一番の方がコンサートで演奏される機会も多い様です。この様に芸術作品の評価は、実際に作品そのもので判断するのが意外と少ないと言えます。作品に付随した実に沢山の要素が評価を決定し出します。創作に掛けた時間の他に、誰が創ったのかが問われます。高名な人の作品であれば、どの様な作品でも立ち所に優れた作品として判断されます。又、何時創ったのかが問われます。若い時の作品よりも、譬え駄作であっても円熟期の時の作品が高く評価されることがあります。

更に、評価を決定し出すものに〈言葉〉があります。例えば音楽作品が評論家によって名文で紹介されると高い評価を得ることになります。あるいはマスコミやインターネットなどで〈言葉〉や〈映像〉が広く伝播されて有名になると、これ又立ち所に評価が良くなります。有名であれば評価が良くなるのです。これらの精神の裡には名声や金銭欲への同衾が考えられます。従って作品そのものへの評価は極めて困難になりますが、これらの他に〈時間〉という公正で客観性の高いもう一つの指標があります。つまり良い作品は作者が死んだ後でも、長く人々の心に感動が残って作品が永遠化されます。例えばＪ・Ｓ・バッハの音楽作品があります。生前のバッハは殆ど無名でしたので余り演奏されることもなく聴かれる機会も殆どありませんでした。寧ろ息子たちの方が時流に乗った作品を創っていたので有名だったのです。ところが死んで七十九年後に、メンデルスゾーンが『マタイ受難曲』を演奏してから、瞬く間に世界中に広がったのです。何故なら時間という篩にかけられたにも拘わらず、人々の心に感動を呼び起こして優れた良い作品であることが証明されたからです。

死んだ後に有名になったのは音楽家のバッハばかりではありません。女性思想家のシモーヌ

・ヴェイユは生前に一冊の本も刊行せず、厖大な原稿やノートなどが残されていただけでした。あるいは今では〈絵画の父〉と言われるポール・セザンヌもパリでは認められずに、故郷のエクス＝アン＝プロヴァンスに引き籠もって描いた絵画をパリで開催されるサロンに応募しましたが、アカデミーの評価は低く毎年落選するばかりでした。我が国の詩人としては宮澤賢治や中原中也などがおります。宮澤賢治の有名な「雨ニモマケズ」の詩は手帳に書かれていたもので、生前には何処にも発表させずに死後に発見されたものです。中原中也が生前に刊行した詩集は『山羊の歌』一冊だけで、主として文学仲間に知られていただけでした。

この様に生前の栄光とは無縁の創作者には枚挙に遑ありません。しかし、死後に栄光を手にした創作者の胸像を創ることに対して、作品を知るための努力が重要であるとアランは言っています。例えば画家の彫像を創ることに対して、アランは次のとおり書いています。

「もしもあなたが彫像を必要とするなら、その時はスポーツ選手とか俳優とか美しい娘とかのイマージュを真似るでしょうし、それらの美しさは見た目にも心地よいものです。でも、それらの彫像は何時か消滅します。毎日消滅しているのです。大理石とか青銅で普及版を急いで創りなさい。しかし、画家を表すのに上着やベレー帽やパレットで表すのは止めて下さい。彼らの作品で表して下さい」と書いてから、彫像を創ることよりも作品をコピーして、多くの人々に作品を鑑賞することを勧めて、このプロポを結んでいます。まさにアランは、作品そのものを鑑賞して評価せよと言っているのです。作品とは直接関係のない地位や名声などの要素によって判断するのではなく、作品そのものを公正に評価すべきです。この精神は、何も芸術作品の評価のみに適用すべきでなく、人物そのものの評価にも適用すべきでしょう。この精神は、昨今の新聞紙上を賑わせた政治家や官僚たちの〈忖度〉という行為も反省させるものであり、不公平な特別待遇も解消された真に成熟した社会へ発展するに違いありません。何故ならこの精神は、自由と平等を目指す民主主義の根幹でもあるからです。（完）

百二十三　精神の自由は稀有

精神の自由は、それを磨くことによって屢々逆説的に批評精神までを押し進めて、突然子供の様な純真さに戻る側面があることをアランは指摘します。更に、手本になる話をするが、それを望んだりしないことがあります。手本を望まないのです。つまり進むべき道を示しながら堕落して行く指導者や、盗みを働いている警官の様であるとアランは言います。堕落したり盗みを働くことは、決して精神の自由と直結するものではありませんが、直結しないことを証明するのは極めて困難で、一九〇八年八月四日のプロポでアランはパストゥールの行った実験について引用します。

「パストゥールは、同類のものを何も見付けなかったのは確かです。スープや尿が入ったフラスコを見せて、空気中に放って置かれると微生物で一杯になることを示します。パストゥールは非常に簡単に想像出来る実験によって、もしも熱して全ての細菌が消滅する様にして元に戻らない様にしたなら、微生物は決して生まれないことを立証しました。その場合、それは少なくとも生物は胚珠から生まれることを立証しておりますが、立証出来ないことは全ての生物がまさに単純に出来ていて一つの細胞から形づくられて一つの胚珠から何時も生まれていることです」。

〈一つの細胞〉から〈一つの胚珠〉が形づくられることが実験から証明出来ても、その他の数々の種類の〈一つの細胞〉から〈一つの胚珠〉が各々形づくられることを、パストゥールは各々の実験で見付けなかったのであり、それは〈一つ胚珠〉以外の別のものであり得ないことを証明するのは不可能であることをアランは言います。つまり実験は一つの原因から一つの結果を証明するだけです。「立証出来ないことは全ての生物がまさに単純に出来ていて一つの細胞から形づくられて一つの胚珠から何時も生まれていることです」と書いてアランは、全ての生物についての証明の困難さを指摘します。「実験はその通りであると理解されることであって、それが別のものではあり得ないということを理解させられません」。何故なら、新薬の開発に際してモルモットで実験して成功しても、そのまま人間に投与出来ません。人間に投与したなら、モルモットでは現れなかった有害な負の現象が幾つか現れるかも知れないからです。数々の人体実験も行われている様です。新薬の開発に莫大な費用がかかる所以でもあるのでしょう。しかし、パストゥールの実験は一つの細胞から一つの胚珠を導くだけですから、或る種の論理の飛躍が望まれることになって仕舞います。「パストゥールは飛躍に駆られてカーブでスリップした様なもので、窮地に陥って仕舞いました」と書いて、アランはこのプロポを終えています。

順調にモルモットで証明出来ても、その証明をもって人間に適用出来ない処が実験にはありますが、飛躍すること無く真実を直観し推測出来ることが精神の自由にはあるのです。勿論、精神の自由は、自由であるから何でも出来るとする精神ではありません。〈突然子供の様な純真さに戻る〉こともありますが、成熟した精神は決して子供っぽく振舞う必要は無いともアランは言っています。それにしても現代の我が国には、この子供っぽく振舞う場面が実に多い様に思います。取分けマスコミなどを通して子供染みた言動に溢れていますが、その結果少しも彼らの精神が自由で無いことが分かります。何故なら自由であることは、必要と思われるあらゆる不自由を克服した者に保持されるものであるからです。〈堕落したり盗みを働くこと〉は、決して必要と思われる不自由を克服したもので無いのは自明です。それとは逆に、堕落しなかったり盗みを働かなかったりすることが自由には必要ですが、それを証明することはなかなか困難です。何故な

ら〈堕落したり盗みを働くこと〉も自由ではないか、と子供っぽい精神は主張するからです。しかし、そこには精神の懶惰があるので警戒せよ、とアランは言います。権力や慣習に対しても警戒せよ、とアランは言います。

権力には精神の自由が無いのです。勿論、慣習にも精神の自由がありません。権力者は権力の保持に邁進する余り、多くの人々の意見に耳を傾けなくなります。権力に都合の悪い意見を排斥しようとします。精神が自由で無いのです。最善の意見を理解出来なくなるのです。特別待遇や不公正や不平等を当然のこととして受け入れます。そして、その様な状況を余す処なく許容している〈戦争〉に親しい考えを抱きます。戦争は、特別待遇や不公正や不平等の温床です。何故なら、国家が戦争で敗れては全てが不幸になるのですから、あらゆる忍び難きことが繁殖して行くからです。従って権力者たちが戦争をちらつかせる時は、必ず特別待遇や不公正や不平等が行われている時でもあります。彼らは「戦争の無い歴史は無い」と言って、まるで野球チームやサッカーチームの監督の様に、全員が一つに纏まることを美徳の如く評価します。しかし、そこからは最善を選択出来る精神の自由が欠如して来ます。近年の北朝鮮の指導者はその最たるものでしょうが、それに対抗しようとする国家元首たちも逆説的に精神の自由を喪失させ様としています。戦争は戦うことを目的にしているのですから、相手に勝つための精神のみが優先されて、最善を選択出来る精神の自由は稀薄になります。平和の時代には警戒しなければならない精神なのです。

拉致被害者を連行したり、原・水爆や弾道ミサイルの実験を強行したりしている北朝鮮の問題についても、我が国が北朝鮮と人も物も盛んに交流して来ていれば、北朝鮮の社会も豊かになって我が国が多くの情報を把握出来る様になるので、行方不明の拉致被害者も発見され易くなっただろうと考えます。そして原・水爆や弾道ミサイルの実験を強行している北朝鮮の国民も、世界中の正確な情報を知る様になるに違いないので、指導者も早く交代する様になったかも知れないのです。確かに「戦争の無い歴史は無い」のでしょうが、戦闘が終わらない戦争も無いのです。如何なる人間も、戦争が起これば必ず終戦（休戦）を迎えて、必ず戦闘を終わりにして来たのです。つまり終わりの無い戦争も歴史には無いのです。何故なら、如何なる戦争も間違いであったからです。そして、如何なる人間も間違いを犯します。しかし、間違いを犯してもそれを間違いと認めて最善の選択を可能にする精神の自由が稀有なのです。精神の自由が稀有で無いためには権力や慣習に捕らわれないことです。そして子供っぽく振る舞って喧嘩をしないことです。

（完）

百二十四　学士号を取る術

フランスの高校生が大学に入学するためには、大学入学資格試験（バカロレア）という全国規模の国家統一試験に合格しなければなりません。正確に言うなら、この試験は中等教育修了を認定するもので、専門ごとのカテゴリーに分かれている筆記と面接の試験があります。従って大学入学資格者は、原則としてソルボンヌ大学の様なフランスのどの大学にも入学出来ます。その他に各省庁が所轄する別個の高等教育機関であるグランドゼコールがありますが、難関の入学試験も別個に行われています。大学入学資格者とは一般的に前者を指します。

アランは、トト君という大学入学資格者が文学士になるために、次なる闘いの準備をバカンス中にやっているのを見て忠告します。「トトよ、心配しないで下さい。あなたは苦労が始まった様な気でいますが、終わったのです。バカロレア（大学入学資格）は厳しい試験でした。少なくとも、敢えて敢然と立ち向かう青春時代の美しい勇気があなたになければなりませんでした。あなたは科学や文学の全てを覚え、それらを書いたり話したりすることが要求されました。あなたは解答して成長し飛躍したと私は理解しましたが、まるで風で揺れる木の上を走るリスの様です。それは素晴らしい勉強で、一年間の勉強として最早やることがありません。歳を取ると人間は億劫になります」と言うことをアランは一九〇八年八月五日のプロポに書いています。それから重要なことは何であるのかもアランは言います。「一人前の人間になることが要求されます。脅えることはありません。そんなに難しいことではありません。礼儀正しくすること、時間を守ること、そして退屈を我慢するのを覚えることしか重要なことはありません」とアランは言います。

一人前になるには、先ずは相応の年齢になるまで待たなければなりません。その点について大学入学資格者は既に相応の年齢になっているから問題はありませんが、更に〈礼儀正しくすること、時間を守ること、そして退屈を我慢するのを覚えること〉が重要であると忠告します。それに反して子供は礼儀正しくありませんし、時間を守れませんし、退屈になると駄々をこねます。トト君は大学入学資格者になったのですから、一人前の人間になって学士号を取得しなければなりません。そのためには授業には出席せよとアランは忠告します。「少なくとも授業時間は忘れないで受けて下さい。これらの尊敬すべき人々が学校には少しいて、自分の子供の様に愛しています。ですから出席して、時には頭を上下に動かして納得し、ノートを殴り書きして、頬笑むべき処では頬笑んで下さい」と言って、授業の退屈さに我慢することも覚えなければなりません。そして出来れば先生の家へ行くことも勧めます。何故なら授業や試験をする時の先生と、自宅で話をしてくれる時の先生は明らかに異なります。授業を行っている先生は、「学士号の候補者となった時にお人好しで全く明るく晴れやかだと思ったその人間とは同一の人間」であることをアランは指摘します。そして間違えても構わないと言います。それは更にもっと向上して進歩するためのものであるからです。向上して進歩することとは、間違えることでもあるのです。

「あなたは間違えることを恐れてはいけません。間違っていても、笑われるだけです。間違わない人がいるでしょうか。友だちのトトよ、今からは、礼儀に反した間違いは最早あなたには何もないのです」と言って、アランはトト君を励まします。そして、「実力ある人々を尊敬すること、権威に耐えること、人の話を聞くこと、形式を検討すること、意見を変えなければならない時には意見を変えること、無礼な青春にはさよならを言うことを覚える」ことを勧めます。〈無礼

な青春〉にさよならを言わなければなりませんが、そのためには実力ある人を尊敬しなければなりません。何故なら尊敬することが出来ない人は独りよがりになって真実を見失うからです。しかし自らの意見を表すことも大切であり権威に潰されないで耐えることも必要です。人の話を聞くことも大切で、自らの思考を説得力あるものにしてくれます。形式は内容に合わせたものでなければなりません。そして、意見を変えなければならない時には意見を変えられる人が一人前の人間の証でもあります。この様にして一人前になる術を覚えることは大事ですが、アランは覚えるだけでは十分ではないと言います。

「何故なら覚えるだけでは十分でないからです。教養がなければなりませんし、良いセンスを持っていなければならないからです。話しながら考え出す習慣を無くさなければなりません、習慣に対しては理性に高めなければなりません。そして、それが出来る様になる時は、信仰の様になります。それ故に、お祈りを何度も言い、ソルボンヌのミサに参加する支度をしなさい。その後で、お祈りを言うでしょう。あなたの子供時代は終わりです。今は、人間としてのあなたの仕事を覚えて下さい」と書いてこのプロポは終わっています。

　以上の様に学士号を取得することは、知識や学力のみでは不十分であるとアランは指摘します。知識や学力のみを問題にすると、現代では最早人間を不幸にします。何故ならコンピュータの方が遙かに便利であるからです。しかし、〈教養〉とか〈良いセンス〉はコンピュータが最も苦手にする処です。教養ある人は自ら熟考したことを話します。良いセンスを持つ人は本物を沢山見て感覚を磨いて来ました。セザンヌの絵を観たことが無い人に、セザンヌの絵について説明しても理解出来ません。同様に、バッハの音楽を聴いたことが無い人に、バッハの音楽について説明しても理解出来ません。あるいは一週間という時間を理解することは、カレンダーを見ることではありません。実際に自ら一週間という時間を体験したことがある者だけが理解可能です。つまり他のものでは代替出来ないことを理解する処から教養が生まれて来ますし、良いセンスが養われて来ます。もっと適切に言うなら、人間が他のものでは代わりが出来ない人格が確立して来ます。従って学士号は、相当の人格を確立した人に与えられるべきものであると言っても過言では無いと思います。偶々点数が良かった試験の結果に対して与えられるべきものではない様です。抽象化された戦いの結果を志向する子供であってはなりません。生命の充実を理解した人間としての仕事を志向する者でなければなりません。（完）

百二十五　戦争の情熱

戦争についての分析を、アランは或る哲学者との対話を通して一九〇八年八月十日のプロポで行っています。その哲学者は「私が恐いのは、理由の無い戦争である。そこには労働者たちがおり、監視人たちがいる。誰もが貧しく、働かざるを得ない。今は、争われるべき如何なる財産もない。しかし、見てご覧なさい。彼らは、通りを遮断する何枚もの板を、一方から他方へ激しく投げつける人々であり、闘犬の様に殆ど喜びを抱いていると私は言う。戦争は喜びなのではないだろうか」とアランに尋ねます。これに対してアランの答えは次のとおりです。

「戦争は喜びですが、私は大変にそれを恐れます。そして恐らく、あらゆる喜びの中で最も大きなものであり、あるいはこう言った方が良ければ、スポーツの中で一番心惹かれるものです。利害の対立として戦争を見ない様にして下さい。利害の対立は、向かい合った人間を対立させることになり、一方は他方の相手から通りを遮断します。しかし、一方が他方に身を投げて関わり合うには、一種の酔いとか怒りを抱く者にならなければなりませんが、悲しいことにそういう彼らは何処にもおります」と言って、次にボクシングを例にとって〈食欲と欲望〉の結果として戦争をやる訳では無いことを指摘します。

「人間とは、じっとしていない機械の様なものです。ボクサーたちを見て下さい。彼らは元気よく動き回って顎を痛めます。あなた（哲学者）はこの酔った二人を非難します。けれども彼らはお酒を飲んでいませんし、闘いが終われば握手を交わしているのを眼にする様に、相手に対しての礼儀正しさは守っております。しかしそのことは、パンチが厳しくないという訳ではありません」と言って、冷静な人間がボクシングをして戦う様に、戦争も人間の感情に関わりなく行われることを更に指摘します。

戦争を喜びと感じる者が、この世には確かに存在しているのです。何故なら退屈で無くなるからです。「部屋の中にじっといていられないことから不幸が始まる」とパスカルは言いましたが、このことに反して戦争には〈一種の酔い〉とか〈怒り〉を抱かせてくれる情熱に溢れています。戦争の原因になるものとは、闘犬の様に戦うことに喜びを抱くことが可能になることです。延いては退屈を感じなくて済むことにあります。

辻馬車が接触しても口論になり、パンチを出したりナイフで切りつけるまでになることもあり得ます。最初はゲームの様なものでしたが、やがて本気の喧嘩になります。あるいはトランプのバカラで遊んでいても、剣を持って決闘するまでになり得ることをアランは指摘しますが、そこまで行くと決闘する理由も分からなくなるのです。

「何故なら、彼らは生きており頑強であるからで、どんなものにも怒りを抱くからです。カラーを付けてワイシャツのボタンをかける人は、直ぐに腹を立てて歯ぎしりします。整理ダンスの引出しと大変上手に決闘しますが、すねを傷付けて仕舞います。あなたは戦争に反対して弾劾しますが、時間の無駄です。誰もが理屈では戦争が嫌いです。しかし、現実には起きています」とアランは言って、このプロポを終えています。

戦争が〈現実には起きています〉し、又その原因も様々な具体的要件が語られているのかも知れません。しかし、戦争とは礼儀正しく行うものであり、あらゆる戦いの中で最も情熱に溢れているものの様です。決して叫び声と共に衝動的に行われるものではないのです。動物には戦争が無い所以です。動物の戦いは一瞬一瞬の短い時間で完結しますし、譬え負けても何時までも憾み

辛みを抱き続けることはありません。相手のパンチを受けて、その直後に自分もパンチを出せば戦いになりますが、これが動物の世界にあり得る唯一の戦いです。従って過去から継続して来た具体的要件が如何なるものであっても、動物の世界ではその要件が戦いの真の原因になることは不可能です。これに反して人間のみが行う戦争の場合は異なります。必ず多少なりとも時間が介入してきます。もっと適切に言うなら、そこに流れる時間の長さは人間の英知に関係して来ると言っても良いのです。

もう一度言いますが、動物の世界では叩かれれば直ぐ様叩き返しますし、あるいは逃げ去ります。しかし、叩かれたことを何時までも忘れずに覚えていて、一週間後に叩き返すことはありません。恨み辛みとなって蓄積されることがありません。処が人間は叩かれたことを何時までも忘れずに覚えていて、恨み辛みとなって蓄積されて行きます。恨み辛みという〈情熱〉になって、戦争の原因にもなり得るのです。従って、この種の〈情熱〉を別種の情熱に変えることが、戦争の原因にならないためには必要です。恨み辛みの情熱から、感謝や愛情の情熱へ変換させることが必要です。憾み辛みは人間の負の感情ですから、感謝や愛情の正の感情を育てることが肝要です。正の感情は、共に同じ行動を取ることから始まります。例えば主人と奴隷という異なる身分や行動からは生まれません。両者が同じ芸術作品を見て、同じ音楽を聴き、同じ料理を食べ、同じ問題を語り合い、一緒に歩いたりして対等に交流することから始まります。

ここで現代の我が国の政治状況に目を移すなら、我が国と北朝鮮の関係は交流処ではありません。負の情熱ばかりを助長させて行く政策ばかりが大手を振う政治姿勢では、戦争が現実のものになっても不思議ではありません。早急に、お互いの恨み辛みを溶解させる政策に変換させるべきです。嘗て我が国の首相が折角北朝鮮を訪問しても、おにぎりを持参して相手国の料理を一つも口にしなかった様ですが、これでは交流になりませんし、正の情熱も育ちません。現在では殆ど行われていない民間レベルの交流がもっともっと盛んに行われるべきであると考えます。そして、それに伴って北朝鮮の国民が世界中の情報を速やかに把握出来る方策を、様々な方法で模索する必要があると考えます。戦前の我が国の様に「駆逐米英」一辺倒の国策では決して真実は見えて来ないでしょう。これでは感情そのものも負の情熱で一杯になり、決して情操の感情を知る処まで高められて行くことはないでしょう。戦争の負の情熱は正の情熱に変換させて行くべきであり、そして情操に高めて行くことが戦争を乗り越える有効な手段であると考えます。勿論、このことは近年きな臭くなった我が国の国民にも言えることです。（完）

百二十六　近代主義

カトリック教徒の信仰とは何であるのかを知るためにアランは、信者と話をしますが、その信者が「自分自身のことを実際に話すには、大通りへ素っ裸で出掛けるのと同じ位に不純だと感じて」いるかの如くに、口を閉ざして仕舞います。そんな時に或る日、アランは「顎ひげが長いカトリック教徒と知り合いになりましたが、彼は考えたことを大変上手に言ってくれました。彼の話の要旨は次のとおりです」と書いて、一九〇八年八月十八日のプロポは始まります。信者の話の最後は次のとおりです。

「何かの原則が議論の外に置かれているか否か、そこには生きている人と義務についての活発な議論しかありません。私はその様な原則を受け入れている人々を探します。〈教会〉の中で彼らを見付けます。〈教会〉の教義は、科学の原則が存在し得ない以上のことを証明することは出来ません。私が少なくとも知っていることは、私が思考するためには彼らが必要であるということです。それらは私がその中で自分独自の思考や行為の規範を織りなす枠組みであり、骨格がなければ私は行動しません。自分と似た者たちと一緒にその集団で教義を創ることは始終あります。彼らが言うことが真実か虚偽かを尋ねることは、意味のない質問になります。私が完全に一人前になって最高の人間に成長する手助けをする限り、彼らは有益であると言えます」と信者は結論を言いました。

しかし、〈有益〉であることを〈教会〉の教義は望んでいないから、彼はカトリック教徒ではないとアランは言います。

「〈教会〉は教義が有益であることを望んでいません。真実を与えているのであり、それはテーブルという存在があるような真実です。素朴で純真な人の信仰以外は全てが異端なのです。いずれにしても、私（アラン）の心にある近代主義はローマから非難されたばかりです、何故なら私は異端の一人であるからです」と書いてこのプロポを結んでいます。

聖書の「創世記」によると、アダムは百三十歳の時に男の子を最初にもうけてから、その後息子や娘ももうけて九百三十年生きて死んだとのことです。カトリック信者が〈素朴で純真な人の信仰〉であるなら、このことも〈テーブルという存在があるような真実〉であると理解する人になります。しかし、自らが〈完全に一人前になって最高の人間に成長する手助けをする限り、彼ら（教会の人々）は有益である〉と考える人は異端であるとアランは見做します。従ってアランに言わせると、現代の宗教を信じる人々は殆どが異端と見做せる様です。何故なら誰もが九百三十年も長生き出来ないのは自明の理であると考えるからです。アランにとっては近代主義とは異端でもありました。

集団の中で成長する人は、その集団の人々が言うことが〈真実か虚偽かを尋ねることは、意味のない質問になります〉から、思考することなく信じるだけになります。つまりそれが信者であるのでしょう。しかし現代の信者たちは異端にも拘わらず、自らが属する集団の中で信者であろうと努めますから、良識が培う知性が少しずつ稀薄になって矛盾した意識の中で生活して行くことになります。信じられないことでも信じようとします。この様な自己矛盾の中で、現代の信者たちは自らの信念からも乖離した思想の中で生きていますから、集団の中から近代主義も喪失して行きます。「温故知新」が彼らの合い言葉になりますが、〈温故〉の真実を知ることがなく、〈知新〉ばかりを見ようとします。

従って、歴史を見る眼が画一的になります。〈知新〉のみにとっての歴史になりますから、自らの思考に合わせた歴史が完成します。もっと正確に言うと、彼らは自らの思考に合わせた歴史観によって現代を見ますので、過去の人々が希望したことや理想としていたことが埋没されて消えて仕舞います。過去の〈事実〉に依存された言葉による思考ばかりが語られて、過去の人々が為し得なかった思いが韜晦されて認識されなくなります。まさに旧態依然とした歴史観しか語れなくなり、その挙句に偏狭なナショナリズムの温床が出来上がります。「歴史を客観的に見よ」と彼らは言います。しかし、客観的な歴史とは何でしょうか。当時の人々が希望としたことや理想としたことは、現実には為し得なかったことですから客観的な歴史ではないのでしょうか。過去の事実は過去の人々にとって不本意な出来事が多いにも拘わらず、それらの出来事のみが歴史になるのでしょうか。ここに歴史の陥穽が待ち受けています。出来事でないことや事実でないものも歴史になり得るのです。つまり過去の人々の希望も理想も歴史になり得るのです。例えば国家総動員法の成立（一九三八年）は国が一つになって喜ばしいことでしょうか。この法律が成立したのは事実ですから、国が一つになって営為するのが正しいと見做す思想は歴史的にも正しいのでしょうか。そうではない筈です。「教育勅語」に書いてあることは良いことであるから、現代の我が国の教育にも復活させるべきなのでしょうか。そうではない筈です。国が一つになることよりも、平和な時代に人々が自由に表現したり行動することが正しい社会ではないのでしょうか。子供たちが、戦争時の強制された言葉を鵜呑みにするよりも、美しい日本語で書かれた多くの思想を忍耐しながらも沢山玩味すべきではないのでしょうか。過去の事実が示している間違いを沢山発見して、それこそ客観的に思考し理性的に判断して、その間違いを繰り返さない様にする思想を身につけることではないのでしょうか。過去の人々が実現出来なかった希望や理想を歴史によって理解し、その実現への道を一歩ずつ歩んで行くことを努力すべきではないのでしょうか。為政者の努力とはまさにそこにある筈です。国民を奴隷視して世界の情報を遮断した独裁者が統治する原・水爆を保持する国との戦争の恐怖を煽る、間違った政策を正当化することが為政者の正しい努力ではない筈です。共に戦争を自らの権力のために利用する為政者に変わりありません。五十歩百歩であり、繰り返されるその間違いを剔抉すべきではないでしょうか。原爆投下の歴史とは、投下の事実のみが歴史ではなく、その投下が間違いであったことを思考し判断することでもある筈です。それが近代主義の思想であり、戦争を早く終わらせるためであったとする口実は封建主義的であり、前近代主義の思想に過ぎない筈です。（完）

百二十七　ジャンヌ・ダルクの罪

アランは「アナトール・フランスを読んで、ジャンヌ・ダルクの罪とは何であったのか、今は良く理解した様に思います」と一九〇八年八月二十日のプロポで書き始めています。恐らく、その時に読んだのは刊行されたばかりの «Vie de Jeanne d'Arc,1908»（『ジャンヌ・ダルクの生涯』）であっただろうと思います。因みに、本書は吉江孤雁により一九一七年に翻訳されていますが、ここではアランが言う〈ジャンヌ・ダルクの罪〉について考えてみたいと思います。先ずアランは次の様に書いています。

「彼女は公式の手続きを軽視していました。〈神〉や聖人たちと直接話が出来たと言っていました。ローマ教皇でもそこまで言いませんでした。取分け、当時のローマ教皇はそこまで言わなかっただろうと思います。それは〈神〉の言葉と〈悪魔〉の言葉を聞き分けられる最も賢い者たちに共通していることでした」。

ジャンヌ・ダルク（一四一二〜三一）は、神からの啓示を受けたことを一四二八年にシャルル七世に上申して受け入れられ、フランス軍を率いて百年戦争中のイギリス軍と戦った少女でした。奇跡的にもフランス軍を勝利に導き、翌年にオルレアンの囲みを解きましたが、一四三一年にイギリス軍に通じていたルアンの司教らによって邪教徒として焚刑にされた英雄であることは有名です。しかし、彼女への神託をシャルル七世が認めてフランス軍を率いて戦ったことは殆ど狂気の沙汰ですから、その結果が偶々オルレアンを解放したことになっても、その行為そのものには〈罪〉があるとアランは見ていました。

「彼ら（〈教会〉の神学者たち）にとって神話というものは、組織を作るためのものでした。眼には見えない力があり、それは事の成り行きを急激に変えられるものであると教えました。この原則によって、全てが可能でした。幽霊、占い、遠隔作用、蘇生も可能でした。狂人が夢見た世界は、何でも本当の様に見えました。如何なる奇跡も信じました。そのことに注意しなければ狂人が支配することになったでしょう」とアランは書いて、神学者たちとジャンヌ・ダルクとの相違を明確にします。彼女は、神託を信じたことによって〈何でも本当の様に見え〉たのであり、如何なる奇跡も信じました。当時のフランス軍はまさに狂人に支配されて仕舞ったのです。如何なる人間社会も〈夢見た社会〉ではありません。「売ること、買うこと、作物を栽培すること、家を建てること、眠ることであり、それは混乱や無秩序よりも寧ろ安定性を前提に思うこと」、つまり生きることが重要であるとアランは言います。狂人について行く時間はありません。「人間は悪魔と天使がよく出会う悪夢の中で生きることは出来ません」ともアランは言います。アランにとっては結果が全てではないのです。狂人が言うことによって譬え結果が好転しても、それは「自分を見失うこと」になるのです。狂人が英雄であっても同じです。

占い師が言うことは、必ず当たっているでしょう。占い師から「あなたに不幸が起きるでしょう」と言われても当たるでしょうし、「あなたに幸福が訪れるでしょう」と言われても当たるでしょう。何故なら人生にはあらゆることが起きるからです。風邪を引いて寝込むこともあるでしょうし、父親が死ぬこともあるでしょう。あるいは母親の病気が治ることもあるでしょうし、結婚相手が現れることもあるでしょう。しかしながら占い師の言うことは聞かない方が良い、とアランは言っています。何故なら〈自分を見失うこと〉になるからです。色々な人間が将来を占います。政治家も〈教会〉の神学者たちと同じ様に、色々な神話から社会を作ろうとします。

恰もジャンヌ・ダルクになったかの如くに、「景気を良くします」と言います。あるいは「弱者たちのために年金や社会保障を良くします」と言います。ところが社会には色々な側面がありますから、何を言っても当たるだろうと考えているのです。しかし、私たちは狂人について行くことは出来ません。

「私たちの今日は日々快いものですが、やはり秩序を愛しており、事物の中も観念の中も同じです。或る人が大発見をしたと公言するなら、私たちにはその証拠が必要であり、事実とか観念が問題になるのに応じて指で触れるとか、頭で理解したいと思います」とアランは考えます。そして証拠や結果が見えなくても、冷静に思考することを勧めます。「情熱の感情に浮かされないことです。何故なら、この種の間違いには結果が見えないからです。しかし、もしも或る人が自分の心象どおりに、パリを燃やしたいとか、単にエリゼ宮に住んでみたいと思ったならば、彼は狂人と言われるでしょうし、一生を幽閉されます。その様なことは、現代の私たちにとっての破門であり追放です」と書いてこのプロポを終えています。

　ジャンヌ・ダルクは歴史上の英雄になりましたが、党利党略を優先する政治家の様に決して国民に諂うことはありませんでした。党利党略を優先する政治家であれば、必然的に特別待遇や不公平を受入れて保身に走り、敵を捏造することには長けていて、本当の敵と戦うことはないでしょう。本当の敵とは、ジャンヌ・ダルクの場合はイギリス軍でしたが、現代の我が国の場合は北朝鮮ではなく、保身に走る政治家たちに思えてなりません。政治とは衣食住が足りる様にする制度の運用であり、従って政治家には決して高度な思想や人格を必要としないと思考する人々も多い様です。これは英雄たちにも言えることです。英雄にも狷介孤高に守るべき思想も人格も必要ないのかも知れません。ジャンヌ・ダルクの罪とは狂人としての心象を抱いたからではなく、まさに戦争によって高度な思想や人格を韜晦させて仕舞った処にある様に思います。政治家に高潔さや気品を求めるのは間違っているのでしょうか。もしも間違っているとするなら、一般国民と同水準の見方と思考で政治を行う方が適正です。従って、司法においては裁判員制度が確立されて運用されているのですから、行政においても政治家は選挙でなくて、一定人数を抽選とか籤引きで決定した方が理に叶っている様に思います。（完）

百二十八　必要性には人間の顔がある

一九〇八年のフランスは冷夏だった様です。秋も寒く、都会の夫人は酷い天候を嘆いていましたが、自然に何が起きても自然であるとアランは言います。しかし、都会の夫人は「八月は暑くなければいけないわ。今年の意地悪な風は、普通じゃないわ」と言います。しかしアランは、「何もかも普通です。この風も普通の風ですし、太陽と地球の位置によるものです。今朝の風と雲も同じようなもので、昨日の風と雲によるもので、次から次に関係して行きます。あなたの気分が優れなくても何にもなりませんし、あなたに嫌な思いをさせて、更にもっと寒くさせるばかりです」と一九〇八年八月二二日のプロポで言っています。それから六十年間も働きづめで腰の曲がった田舎の老女も言います、「お天気はあるが儘にある。我慢しなければなりません」。

田舎の人々は生身を持って〈必然性〉を実感しているから嘆くことも無く、人間よりも事物に依存しているとアランは言います。事物に働きかける人をプロレタリアとアランは命名していましたし、人間に働きかける人をブルジョアと呼んでいました。この思想を援用するなら、田舎に暮らす人はプロレタリアであり、都会に暮らす人はブルジョアであると言えます。その様にして見ると、田舎の人々は多くの〈必然性〉を理解しています。従って人を非難し告発することよりも、諦めて受け入れることの方が多いのです。

それとは反対に都会の人々は何時も反抗的です。夏には日と戦い、冬には夜と戦います。「彼ら（都会の人々）の労働は、ガラスの空の下で四季を通して同じ調子で行われます。雨は流れて行きます。雪は掃かれます。河は石で出来た河岸を上がったり下がったりして、草原に広がって行くことはありません」とアランは分析します。そして田舎の人々についても次のとおり分析します。

「小麦が発芽したかどうか、木々に花が咲いたかどうか、小麦が収穫出来るまでになったかどうかを見に行きます。見に行くだけで何も出来ません。見に行くことが働く基本要素なのです。仕事を眺めに行くことがあっても、綿布を作り出すことは決してありません」。しかし、都会の人々は「収穫を必要に応じて決めて、自分自身で手に入れて行きます」。その都会にも嵐が無い訳では無いのですが、「人間の嵐であり、苦悩、恐怖、怒りです。〈自然〉は人間の姿をしています」から、大地も「動いたり、叫んだり、泣いたりします。それ故に、私たちは祈ったり、脅したりします。それ故に、私たちはこの世に存在し得ないようなものを信じます」。そして、都会の経営者は「労働者が自分の手を信じているように、工場長を信じています。工場の門は閉じられます。世間の風は決して入って来ません。閉ざされた小さな世界になります。いいえ、そうではありません。価格、供給、交換が、風や潮のように一方から他方の世界へ流れて行きます。各々がバロメーターの箱です。どんな銀行も破産に震えています。希望や恐怖や飢饉には波があります。見抜かなければならない人間の波です。しかし、私には引きつった顔や緊張した拳しか見えません。〈必要性〉が人間の顔を示すようになるや否や、〈必要性〉に嫌な顔をしないことは非常に難しいことなのです」とこのプロポを結んでいます。

田舎の人々は自然という〈必然性〉によって生きていますが、都会の人々は人間の顔がある〈必要性〉によって生活しています。人間は、環境によって生き方を変えなければなりません。その点での認識を間違えるととんでもない不幸が生じます。

ここで、二〇一七年十月下旬に鳥取市内の飲食店で起きたとされる、横綱日馬富士が幕内力士

貴ノ岩へ暴行した事件について述べたいと思います。日馬富士は相撲界という田舎において、恰も自然の嵐の様な暴行を貴ノ岩に加えたものと解釈してみたいと思います。横綱の暴行は、横綱自身において自然の力と同一であるという錯覚が生じていたのかも知れません。自然の〈必然性〉による暴行ですから日馬富士は、貴ノ岩という田舎の人が日馬富士という〈必然性〉を非難したり告発したりしないで暴行を諦めて受け入れるものと錯覚したのではないかと思われます。ところが貴ノ岩が属する部屋の貴乃花親方という都会の人は、何時も反抗的で〈収穫を必要に応じて決めて、自分自身で手に入れて行きます〉から、警察へ被害届を提出したのだろうと推察します。相撲界が田舎の人々だけで巡業して、田舎の人々だけに見せるものであったなら、今回の様な暴行事件によって横綱が引退に追い込まれることは無かっただろうと思います。ところが相撲界の中にも、貴乃花親方の様な都会の人も生まれていたのです。そして、観客も田舎の人々だけではなくなり、ＴＶ放送などにより都会の人々も多く見ているのですから、〈必要性〉に答えなければなりません。日馬富士の暴行に如何なる〈必要性〉があったのでしょうか。やはり都会の人々には十分に理解させられないものの様に思います。こうして日馬富士は引退することによって、田舎の人として生活することを選択したのだろうと思います。不幸中の幸いでしょうが、日馬富士には絵筆を持つことも可能の様です。やれることは色々と見付かることだろうと思います。

しかしながら今回の暴行事件で訝しく思うことは、横綱白鵬が何故現場に同席していたのか、そして何故「ビール瓶は滑り落ちて（日馬富士は）持っていなかった」と真っ先にＴＶに向かって証言したのかという疑問です。被害者の貴ノ岩よりも加害者の日馬富士の方を心配している態度です。史上最多の四十回目の幕の内優勝を達成した時も、優勝インタビューで「日馬富士も貴ノ岩も、もう一度土俵に上げらせてあげたい」と何故言ったのでしょうか。まるで再起出来ないことを前提にしているかの如くに聞こえて仕舞います。まさに白鵬も都会の人ではないでしょうか。〈収穫を必要に応じて決めて、自分自身で手に入れて行〉く人なのです。「強ければ言いたいことが言えるんだ」という川柳を新聞紙上で読みましたが、〈必然性〉を弁えて自然に従い、言いたいことがあっても言わないのが、田舎の人々の集まりである力士たちの中で最高位にある横綱の品格であると考えるのは私独りでしょうか。相撲部屋を管理する親方は、時には都会の人になることもあり得るかも知れませんが、少なくとも真剣勝負に携わる力士は田舎の人でなければなりません。何故なら、人間を相手に行為するのが相撲ですから何よりもその相手を手心や説得が不可能な事物と見做して勝負しなければならないからです。従って白鵬は力士ですから、都会の人であることを放棄して、田舎の人に徹する必要があると考えます。（完）

百二十九　自然の中の美

自然は美しいと言われています。そのことに矛盾は無いのですが、フランス庭園の様に人工的な線や面のものにも美しいと感じることが出来る人は多くいる筈です。この抽象的な美について、アランは決して人工的なものばかりを見ていた訳ではありませんでした。確かに、抽象とは自然と相反するものの様です。自然においては抽象されたものは存在しません。その典型である直線というものは、この世に決して現存しませんし、三角形も立方体も現存しません。現実を厳密に見れば、そういうものは決して存在しません。従って、抽象して現実に存在しないものへの感情の作用であり働きが、美の傍証になるのかも知れません。

自然の中に人工のものを見ると美しく感じることを、アランは一九〇八年八月二四日のプロポに書いています。「自然の中で人間が作った物に出会うと、私は何時も嬉しくなりますが、それは本能でもあります。森の中央を引き裂くように奥へ進む鋼鉄の四本のレールやトンネルの入口の美しさは、私の心を捕らえます」。まさに自然と人工が調和したものの様に感じる処から人は美を感じるのでしょうか。自然の中に人工を感じることが美でしょうか。反対に、人工に自然を感じることは美ではないのでしょうか。「私（アラン）としては、人間を自然的な力と理解しています。自然と同じであり、人間の行為は内面からの力であり、火山や雷と同じ必然性があります」。人間が働きかけたものが人工であったとすれば、人工は〈自然的な力〉に相違ありません。従って人工にも自然を感じることは可能です。この様に考えて来ると、自然も人工もそれ程の相違が無い様に思えます。人間は自然の中に人工を見て美を感じるのであり、同様に人工の中にも自然を見て美を感じるのです。つまり美は人間のものです。動物には無い感情です。ここから美が人間にとって貴重な感情になって来ます。人間と動物を区別する重要なしるしになって来ます。

動物は自然を見て美しいと感じないでしょう。しかし、人間は幾らでも自然を見て美しいと感じます。「世界は美しいものに溢れていて、全ての事物は結びついていると私は強く信じています」とアランは言います。その様な思想が、自然の中に美を感じさせるのです。自然の中に人工を見るからです。例えば、富士山を見て美しいと感じるのは、富士山の姿が均整の取れた三角形という人工的な形を想像させてくれることが出来るからです。青空の下での白砂青松を見て美しいと感じるのも、色彩の配色が人の手によって規則的に施されているかの如く見えるからです。嘗て山登りを趣味にしていた頃に、北アルプスの雲ノ平を歩いていた時に見た風景の美しさには目を見張りました。まるで箱庭の様に見えたのです。まるで庭師が計算し尽くして岩や草木を配置しているかの如くに見えたのです。とても自然の業とは思えませんでした。

この様に考えて来ると、アランが「美しいものは正しい」と言う言葉も、納得が出来ます。一般的に美学は、倫理学とは別ものであるのかも知れません。美しいことは、善悪の問題と関係が無いと考えるのかも知れません。しかし、美は人間だけが所有できる感情であり、善意も人間だけが認識出来る感情です。動物と識別されて人間だけが所有していると認識出来る感情は、情操の感情のみです。従って情操とは美を感じる感情でもあると言えます。恨み辛みを抱いている感情には、美を感じる余裕はありません。復讐心に燃えている感情にも、美を感じる余裕は無いでしょう。従って、自然の中に美を感じる人の心は、自ずと善悪の問題に対しても〈正しい〉ものに成るに違いありません。

更に、自然の中の美は孤立していないこともアランは指摘して、「世界は美しいものに溢れていて、全ての事物は結びついていると私（アラン）は強く信じています」と言います。自然の中の小さなものは何も言わないし感覚も無いが、それぞれに存在理由があり、全てのものが全てのものの起因となって繋がっていて、孤立していないのです。人間についても同じです。単独行をする登山者は決して孤独ではありません。何故なら、自然の中に美を見出して全てのものと繋がっているからです。孤立していると感じている人は、厳密に言えば自然を見ても美を感じることが出来ません。何故なら美は、自然と人工とを結び付ける様に、人と人とを結び付ける性質も所有しているからです。自然の中に美を見出す者は全てのものとの繋がりを実感するでしょうし、自然という言葉が最良の媒介者になって来るに違いありません。このプロポを結んでアランは次の様に自然を美しく語っています。

「人々は海や山を愛します。何故なら、そこでの力強い働きが眼に見えるからです。それは私たちの言葉です。文字の綴りを言った後で読まなければならず、全てのものから全てのものまでの繋がりを一瞥して把握するのを学ばなければなりません。その点で慣習を先んじることが出来ます。もしも〈偉大な書物〉である自然を完璧に読むことを覚えたなら、全てが美しくなるでしょう」。

自然は美しくありません。自然を美しいと感じるのは、人間だけが所有する情操という感情が働くからですと言っても良いのです。情操は又、決して悪い感情でもありません。それは人間の精神を偏狭にする恨み辛みや人を傷つける復讐心とは無縁の、高邁な人間にとっての正しい感情です。そういう人間が見る自然は美しいもので溢れています。あるいは寧ろ、自然がそういう人間に育てているのかも知れません。何故なら、自然の美は人間と結び付いているからです。（完）

百三十　歴史家の愚行（谷間の百合）

歴史とは何でしょうか。事実の羅列ではない筈です。歴史の中には所謂事実が無数にあります。それこそ殆ど無限にあると言っても良いでしょう。人間の数だけあるのですから、事実を整理する必要があります。時系列に整理することも一つの方法であり、何らかの共通項に基づいて取捨選択して整理する方法が考えられます。そこから歴史とは時代区分のことであると言った歴史家がおります。尤もらしい考え方です。しかしアランの場合は先ず、歴史家たちが好きなことを言って楽しんでいるのを放って置けないのです。「言うのは易しいです。泥棒や人殺しも、同様に彼らがやりたいように楽しませて置けないのは何故でしょうか。歴史家たちが誰も殺していないのは、私も知っています。しかし、それでも害が無いとは思いません。彼らは何にでも侵入して、その精神を殆ど単独で形づくっているのを私（アラン）は知っています」と一九〇八年八月二五日のプロポに書きます。歴史が、本当の事実から成っていれば問題は生じないと歴史家の多くは考えますが、アランは事実の羅列が歴史になることに同意しませんし共感しません。若者たちは、まさに歴史を覚えるのにへとへとに成っていて、知性を殺しているとアランには映ります。その様な若者たちに、アランはバルザックの小説『谷間の百合』を読む様に勧めます。「一般的に、公平な読者はそこに強い感動を覚え、自らの心の中で何処までも鳴り響いています。それは、自分の子供たちを本能的に愛し、陰鬱な夫に義務から仕える貞節な女性の歴史です」とこの小説を紹介しています。ところが、不意の口づけ以外に親密なことは何も起こらないのに、彼女の感情が純潔な感情を取り戻すまでをアランは次の様に、美しく書いています。

「可愛らしい若い女性が恋愛感情を抱き始めて、不意に彼から口づけされます。羞恥心が反乱を起こしたように襲って来ます。そして次に和解の心です。彼女は、天使のような純潔な感情を取り戻します。そして事態は進んでいきますが、大変に無垢な最初の口づけの他には、何も親密なことは起こりません。」

それでも彼が他の女性に溺れているために、彼女は激しい嫉妬に襲われます。そして死にかかっている時に、無垢の口づけが彼女を燃え上がらせて来たことを告白します。そして、これらの感情が歴史であることをアランは指摘しています。

「間接的に言うと、感情の問題は歴史の問題になります。恐らく、嘘つき女が言う沢山の枝葉末節の話を読んだり受け入れることがなかったなら、最早小説を理解したり愛することは出来ません。…（中略）… ソルボンヌ大学の歴史家は、デカルトの二つの思想を一緒に認めるために書いている学生に言っていました。「何故あなたはそれらの思想を一致させたいのですか。あなたはデカルトの思想であることを十分に承知していますし、テキストが変わる訳ではありません。それ以上の何を望むのですか。」」

以上の様にして、このプロポは終わります。歴史は一般的な事実の羅列ではありません。誤解を恐れずに言えば、歴史は人間の感情によって作られるのであり、観念によって事実が証明されるのです。観念も無く観察する人は経験になりませんから、実は何も観察していないことになります。事実とは見ているだけのことではありません。そこで推測し観念を作り上げることで感情の問題にして行きます。不意に口づけされても、全ての人が純潔な感情になる訳ではありません。そこで純潔な感情になるから、初めて事実が証明されて歴史になるのです。

地球が自転していることは一般的に事実ですが、地球ばかりを見ていても自転していることを

認識出来ません。あるいは星々が東から西へ移動して行くのを見ているだけでも事実を証明出来ません。繰返し観測することと、記憶と、再現と、幾何学に基づいて測定することと、それらを判断する感情までもが加わって仮説を確かなものとして認識して行くことが事実であるとアランは言います。つまり事実とは、仮説に基づいた観念と様々な道具や器具類を使用しながら最良のものを認識する学問においてのみ、次々と発見出来るものです。その意味で、〈感情の問題は歴史の問題〉になるのです。〈不意の口づけ〉という行為だけが、決して事実ではないのです。〈純潔な感情〉になることによって事実が生まれて来て、歴史になって行きます。そこでは、事実に基づいた必然姓を確認することで歴史になって行きます。

ところが骰子の立方体という幾何学的形状も、一つの事実と見做して歴史を決定することもあり得る訳です。対象を正しく把握する両目も両腕も感情もお構いなしです。例えば、文献のみを鵜呑みにして年号と事件をへとへとになって調査することで、それが実証的研究と思い込んでいる歴史家が多過ぎるのです。〈不意の口づけ〉ばかりを過信する歴史家が多過ぎるために、〈純潔な感情〉を忘れる愚行を犯してばかりいるのです。文献は時として権力者たちによって捏造されることもあり得ます。あるいは文献から脱落したり消失したりした行為も無数にある筈です。それらの行為を再現させるためには感情の力も必要になってきますが、所謂実証的歴史家たちはそれらの力を無視するばかりでなく、侮蔑している機会すら多くあります。それらはアランがソルボンヌ大学教授の歴史家たちを相手にしなかった所以かも知れません。結果的に事実よりも権力が優先して、ソルボンヌ大学内では言いたいことが言えないと直観したアランは、決して大学教授の肩書に拘らず、一介の高校教師として定年まで勤め上げながら、数々の著作を刊行した所以であったのは確かな様です。（完）

アランと共に（III）

2017年９月28日登録開始

http://p.booklog.jp/book/117489

著者：高村昌憲
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/117489

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト